田野町文化財調査報告書　第43集

ズクノ山第２遺跡Ｆ地区

県営畑地帯総合整備事業鹿村野地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

報告書抄録

ふりがな	ずくのやまだいいせきちく
書名	ズクノ山第2遺跡F地区
副書名	県営畑地帯総合整備事業鹿村野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	山野町文化財調査報告書
シリーズ番号	第43集
編著者名	田野町教育委員会　文化財調査事務所　金丸武司
編集機関	山野町教育委員会
所在地	宮崎県宮崎郡山野町甲2818番地
発行年月日	2002年3月
ふりがな	ずくのやまだいいせきちく
所収遺跡名	ズクノ山第2遺跡F地区
ふりがな	みやざきけんみやざきぐんたのちょうおつうえのはら（かむらの）
遺跡所在地	宮崎県宮崎郡山野町乙上ノ原13308－1外(鹿村野)
調査機関	平成11年8月17日～12月23日
調査面積	約8,200㎡
調査原因	平成11年度県営緊急畑地帯総合整備事業鹿村野地区
主な時代	旧石器時代・縄文時代早期～後期・弥生時代
主な遺物	スクレイパー、剥片、細石刃、加栗山式土器、前平式土器、桑ノ丸式土器、下剥峯式土器、押型文土器、平栫式土器、塞ノ神式土器、曽畑式土器、深浦式土器、岩崎式土器、中津式土器、石鏃、尖頭状石器、磨石、弥生土器
主な遺構	礫群、集石遺構、土坑（炉穴含む）、ピット、柱穴

例　　言

1・本書は、平成９年度から実施された県営畑地帯総合整備事業鹿村野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、平成11年度に実施したズクノ山第２遺跡F地区における調査結果を報告するものである。

2・本遺跡の現地調査及び室内調査は、宮崎県中部農林振興局からの受託事業と文化庁の国庫補助事業を得て、田野町教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体・調査組織　田野町教育委員会

(平成11年度)	教育長		堀内　倪
	社会教育課長		永谷　弘
	社会教育課長補佐兼係長	(４～６月)	川口　博文
		(７～３月)	岩切　康哲
	埋蔵文化財担当	同主査	森田　浩史
		同主任主事	金丸　武司
	調査及び調査事務担当	同主査	森田　浩史（事務担当）
		同主任主事	金丸　武司（調査担当）
(平成13年度)	教育長	(４月～９月)	堀内　倪
		(10月～３月)	西山　英介
	社会教育課長		永谷　弘
	社会教育課長補佐		川越　修治
	社会教育係長		後藤　敏典
	埋蔵文化財担当	同主査	森田　浩史（調整担当）
		同主事	金丸　武司（編集担当）
		同嘱託	吉住　さと子

3・現地の作業員として、田野町内の方から多数の参加をいただいた。

4・室内調査の実施にあたり,下記の方々の協力を得た。

[redacted]

5・現地における遺構図は、町内の作業員を中心とし、伊東但氏、井田篤氏の協力を得て作成した。また一部は、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6・本書の執筆・編集及び現地の写真撮影は金丸が行った。

7・遺物の写真撮影及び、写真の図版作成は吉住が行った。

8・遺物の観察表は、森田と吉住が分担して作成した。

9・本書で用いた方位は磁北、標高は海抜絶対高である。

10・本書の色調表示は、農水省農林水産技術会事務局監修の「標準土色帳」を参考にした。

11・遺構の略号は、集石遺構：SI、土坑：SC、ピット：SPとし、遺構毎に番号を別に設定した。遺物は通し番号を用いた。

本文目次

第Ⅰ章　序説 …… 1
　第1節　調査に至る経緯 …… 1
　第2節　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1
第Ⅱ章　調査の結果 …… 3
　第1節　調査の概要 …… 3
　第2節　層序 …… 3
　第3節　各調査区の概要 …… 8
　第4節　旧石器時代 …… 10
　第5節縄文時代の遺構 …… 10
　　Ⅰ・礫群 …… 12
　　Ⅱ・集石遺構 …… 12
　　Ⅲ・土坑 …… 25
　　Ⅳ・ピット …… 27
　　Ⅴ・柱穴 …… 27
　第6節　縄文時代の出土遺物 …… 27
　　Ⅰ・縄文時代早期の土器 …… 27
　　Ⅱ・縄文時代早期の石器 …… 46
　　Ⅲ・縄文時代早期以降の土器 …… 59
第Ⅲ章　まとめ …… 59

図版目次

第1図　町内遺跡分布図 …… 2
第2図　調査区周辺地形図 …… 2
第3図　調査区設定配置図 …… 4
第4図　調査区土層柱状模式図 …… 6
第5図　e区西壁土層断面図 …… 6
第6図　e区旧石器時代遺物分布図 …… 9
第7図　出土遺物実測図 …… 9
第8図　a～c区遺構配置図 …… 11
第9図　検出遺構実測図 …… 13
第10図　検出遺構実測図 …… 14
第11図　検出遺構実測図 …… 16
第12図　検出遺構実測図 …… 18

本文目次

第13図　検出遺構実測図 …… 20
第14図　検出遺構実測図 …… 21
第15図　検出遺構実測図 …… 22
第16図　検出遺構実測図 …… 24
第17図　検出遺構実測図 …… 26
第18図　検出遺構実測図 …… 28
第19図　検出遺構実測図 …… 29
第20図　検出遺構実測図 …… 30
第21図　出土遺物実測図 …… 32
第22図　出土遺物実測図 …… 33
第23図　出土遺物実測図 …… 34
第24図　出土遺物実測図 …… 36
第25図　出土遺物実測図 …… 37
第26図　出土遺物実測図 …… 38
第27図　出土遺物実測図 …… 39
第28図　出土遺物実測図 …… 40
第29図　出土遺物実測図 …… 42
第30図　出土遺物実測図 …… 43
第31図　出土遺物実測図 …… 45
第32図　出土遺物実測図 …… 47
第33図　出土遺物実測図 …… 48
第34図　出土遺物実測図 …… 49
第35図　出土遺物実測図 …… 50
第36図　遺構内出土遺物実測図 …… 51

表目次

表1　出土土器観察表 …… 52
表2　出土土器観察表 …… 53
表3　出土土器観察表 …… 54
表4　出土土器観察表 …… 55
表5　出土土器観察表 …… 56
表6　出土土器観察表 …… 57
表7　出土土器観察表 …… 58

写 真 図 版 目 次

図版1　旧石器出土トレンチ近景、旧石器遺物出土状況 …… 65
図版2　旧石器遺物出土状況、c区土層断面 …… 66
図版3　礫群－1検出状況、礫群－2検出状況 …… 67
図版4　a区集石遺構検出状況、b区集石遺構検出状況、SI－01検出状況 …… 68
図版5　SI－01、SP－01完掘状況、SI－02検出状況、SI－02完掘状況 …… 69
図版6　SI－03完掘状況、SI－04検出状況、SI－04完掘状況 …… 70
図版7　SI－05検出状況、SI－05完掘状況、SI－06完掘状況 …… 71
図版8　SI－07検出状況、SI－07完掘状況、SI－08検出状況 …… 72
図版9　SI－08完掘状況、SI－09検出状況、SI－09完掘状況 …… 73
図版10　SI－10検出状況、SI－10完掘状況、SI－11検出状況 …… 74
図版11　SI－11完掘状況、SI－12検出状況、SI－12完掘状況 …… 75
図版12　SI－13検出状況、SI－13敷石検出状況、SI－13完掘状況 …… 76
図版13　SI－14検出状況、SI－14完掘状況、SI－15検出状況 …… 77
図版14　SI－15完掘状況、SI－16検出状況、SI－16完掘状況 …… 78
図版15　SI－17検出状況、SI－17完掘状況、SI－18検出状況 …… 79
図版16　SI－18完掘状況、SI－19検出状況、SI－19敷石検出状況 …… 80
図版17　SI－19完掘状況、SI－20検出状況、SI－20敷石検出状況 …… 81
図版18　SI－20完掘状況、SI－21検出状況、SI－21敷石検出状況 …… 82
図版19　SI－21完掘状況、SI－22検出状況、SI－22完掘状況 …… 83
図版20　SI－23検出状況、SI－23敷石検出状況、SI－23完掘状況 …… 84
図版21　SI－24検出状況、SI－24完掘状況、SI－25検出状況 …… 85
図版22　SI－26検出状況、SI－26完掘状況、SI－27検出状況 …… 86
図版23　SI－27敷石検出状況、SI－27完掘状況、SI－28検出状況 …… 87
図版24　SI－28完掘状況、SI－29検出状況、SI－29完掘状況 …… 88
図版25　SI－30検出状況、SI－30完掘状況、SI－31検出状況 …… 89
図版26　SI－31完掘状況、SI－32検出状況、SI－32完掘状況 …… 90
図版27　SI－33検出状況、SI－33完掘状況、SI－34検出状況 …… 91
図版28　SI－34完掘状況、SC－01検出状況、SC－01完掘状況 …… 92
図版29　SC－02検出状況、SC－02完掘状況、SC－03検出状況 …… 93
図版30　SC－03完掘状況、SC－04検出状況、SC－04検出状況 …… 94
図版31　SC－04完掘状況、SC－05検出状況、SC－05検出状況 …… 95
図版32　SC－05完掘状況、SC－06検出状況、SC－06七層断面 …… 96
図版33　SC－06完掘状況、SC－07完掘状況、SC－08検出状況 …… 97
図版34　SC－08完掘状況、SC－09完掘状況、SC－10完掘状況 …… 98

図版35　b区遺構完掘状況、b区遺構完掘状況、c区ピット群検出状況 …… 99
図版36　出土土器（加栗山式土器・前平式土器・桑ノ丸式土器） …… 100
図版37　出土土器（桑ノ丸式土器・下剥峯式土器） …… 101
図版38　出土土器（山形押型文土器） …… 102
図版39　出土土器（山形押型文土器） …… 103
図版40　出土土器（山形押型文土器） …… 104
図版41　出土土器（山形押型文土器・楕円押型文土器） …… 105
図版42　出土土器（楕円押型文土器） …… 106
図版43　出土土器（その他の押型文土器・平椿式土器） …… 107
図版44　出土土器（山形押型文土器・撚糸文土器・その他の土器） …… 108
図版45　出土土器（平椿式土器・塞ノ神式土器・縄文土器・撚糸文土器） …… 109
図版46　出土土器・出土石器（旧石器時代の遺物） …… 110
図版47　出土土器（桑ノ丸式土器） …… 111

第Ⅰ章　序　　説

第1節　調査に至る経緯

田野町は、宮崎市の西方約20kmの地点を中心とする田野盆地と、それを取り囲む鰐塚山を始めとする山々からなり、1市（宮崎市）と6町（清武町、高岡町、山之口町、三股町、北郷町）に接している。主な産業は大根やタバコなどを主体とする農業であったが、近年は高速道路や国県道の整備によって交通の要衝の地となり、更に工業団地の整備と企業や専門学校の誘致、宅地開発の進行により、徐々にではあるが発展しつつある。しかし、その一方で農業基盤整備事業や各種開発事業に伴う埋蔵文化財の保存が大きな問題となり、町教育委員会でも調整や調査体制の整備充実を図ってきた。それにもかかわらず、遺跡の大半は記録保存の対象となり、消滅しているのが現状である。

平成11年度は、県営畑地帯総合整備事業鹿村野地区が実施されることとなり、事業地内に県文化課が分布を確認するために試掘調査を行ったところ、部分的に縄文時代早期の遺構、遺物が分布することが明らかになった。平成11年6月5日に中部農林振興局、県文化課、町農業整備課、町教育委員会の四者で協議を行い、設計施工上やむを得ず消滅を免れない部分について発掘調査による記録保存を実施することとなり、平成11年6月18日付で委託契約を締結、同年8月17日から現地の調査に着手した。

調査は、田野町内の皆様のご協力を得ながら同年12月23日に終了した。同遺跡の調査面積は約8,200㎡に至った。

第2節　遺跡の位置と歴史的環境

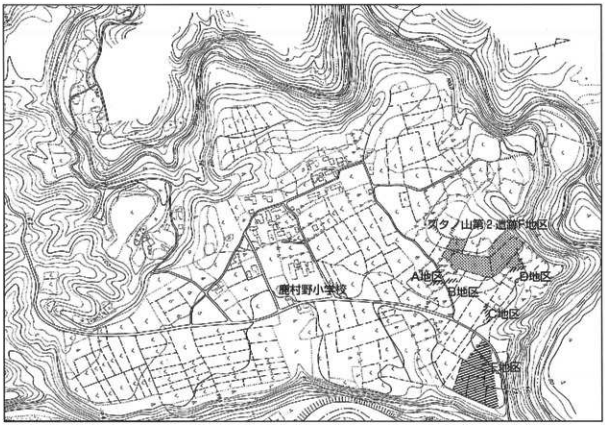
鹿村野地区は田野町の中心部から北北東へ約5km、宮崎市との町境に流れる黒北川と、清武町の町境に流れる清武川に挟まれ、半孤立したなだらかな傾斜を伴う台地である。今回報告を行うズクノ山第2遺跡F地区は、その台地上の北端に当たる丘陵の東側に立地する。この地点の周辺にはズクノ山遺跡群が展開している。

このうちA～C地区からは、アカホヤ火山灰層を挟んで上下より少量の土器が出土した程度に過ぎなかった。D地区の出土遺物も少量であったが、検出されたピットより、横位の山形押型文と、撚糸文が併用された土器が良好な状態で出土した。これは、当該期の県央部における土器文様の一形態を知るうえで注目すべき資料である。

E地区からは、アカホヤ火山灰層直下より長方形の土坑6基が、一列に並んで確認されたほか、早期ローム層下部からは、早期前葉に当たる貝殻条痕文土器と共に、64基に上る集石遺構が検出された。

丘陵西側のズクノ山第1遺跡からは、縄文早期後葉～末葉に位置する土器群と礫群が検出され、また弥生時代中期～後期にかけての竪穴住居跡が多数確認された。

第１図　町内遺跡分布図（1／50,000）



第２図　調査区間周辺地形図（1／8,000）

他にもこの台地には、前平式土器や半椎式土器が、集石遺構を伴って出土した前ノ原第2遺跡が立地するほか、川を隔てた北側には、縄文時代草創期、早期の遺跡として広く知られた椎屋形第1、第2遺跡、東側には清武町が現在も調査を行う船引地区遺跡群も立地するなど、特に縄文時代早期にピークを持ちながらも、遺跡が密集する地点である。

第Ⅱ章　調査の結果

第1節　調査の概要

ズクノ山第2遺跡F地区は、周辺地区から一際高く、標高約95～110mの丘陵地の東側から北側に位置する。調査前は主に畑地であり、一部荒蕪地を含む。県文化課の試掘調査により、アカホヤ火山灰層下位に縄文早期の遺物包含層が確認されていたため、重機によって調査区全面の耕作土及びアカホヤ火山灰層の除去作業を行った。その結果、丘陵の頂部が完全に削平されているほか、調査区内においても、特にd区東側が削平されていることが確認できた。これに対し、北部の斜面上はアカホヤ火山灰層よりも下位の残存が良好であったため、調査を北部斜面に集中させ、手掘りにより遺物包含層の調査を行ったところ、多数の遺物が出土し、傾斜地上には礫群が広がっていることが確認された。この礫を取り除くと、その下位より集石遺構及び土坑が多く検出された。

なお、e区においては、既に縄文時代早期の生活面は削平されていたものの、旧石器時代の遺物が出土する可能性を考え、トレンチを設定し調査を行ったところ、少量ではあるが石器が出土した。

第2節　層序

層序は以下のとおりである。本遺跡は、丘陵地である上に凹凸が激しく、更に後世の開墾や整地により、堆積状況は調査区内でもかなりの差異が認められた。

第Ⅰ層：耕作による撹乱層（10YR3/1）

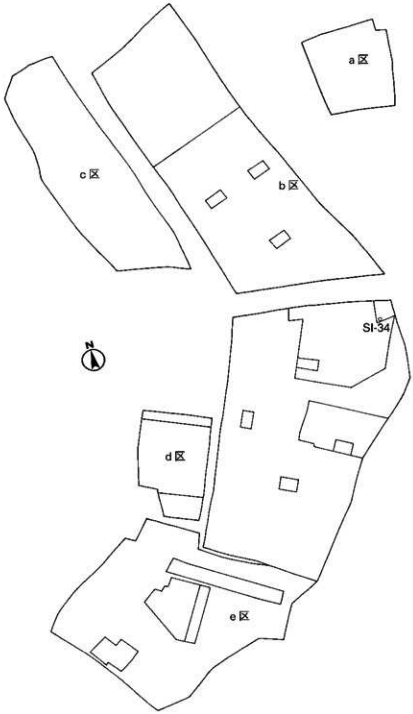
粒子が粗く、さらさらしている。斜面を開墾する際に形成された層である。層中には、開墾の際に削平された下層のブロックが混入するほか、縄文時代早期、後期及び弥生時代の土器や、近・現代の陶磁器が混在する。

第Ⅱ層：整地による撹乱層（10YR2/1）

丘陵の斜面を整地する目的で丘陵頂部より運ばれた層である。Ⅰ層以上に粒子が粗く、小礫が多く含まれる。他に、肥料として用いたものか、灰の混入も少量ながら確認された。また、Ⅰ層と同じく、この層からも遺物が採集されている。

第Ⅲ層：黒色土層（10YR2/1）

整地する際に殆どが削平を受けたため、確認されたのはb区の一部のみである。Ⅰ・Ⅱ層に色調は類似するが、粒子が細かく、締まっている。砂利等の混入物は含まれない。包含層



第3図　調査区設定配置図（1／1,000）

中からの遺物は確認されなかったが、この層を削平し形成したⅠ・Ⅱ層において縄文時代早期以降の遺物が確認されていることから、この層の堆積した時期に、丘陵部において遺跡が形成された可能性が窺える。また、C区で検出された柱穴群の覆土はこの層にあたる。

第Ⅳａ層：アカホヤ火山灰層（10YR 7/6）

火山ガラスを多量に含んだオレンジ色の層である。層は極めて軟質であり、水分、粘性とも殆どない。若干Ⅲ層の色調が混入していることから、二次堆積層であると考えられる。

第Ⅳｂ層：アカホヤ火山灰層（10YR 8/6）

火山ガラスを多量に含んだオレンジ色の層である。Ⅳｂ層のような他層の混入は見られず、プライマリーな状態である。層中には、多量に認められる火山ガラス以外に、僅かではあるが黒色の粒子が含まれる。また、層最下部には白色の粒子及び、オレンジ色の粒子が堆積している。これらの特徴から、この層は一次堆積層であると考えられる。

第Ⅴａ層：黒色ローム層（10YR 3/2）

ｃ区のみで確認された。硬さや粘性などはⅤｂ層とほぼ同じであるが、Ⅴｂ層よりも白色粒子の混入が少ない。ｃ区ではこの層が厚く堆積しており、層中からは多量の遺物が出土している。

第Ⅴｂ層：黒色ローム層（10YR 3/2）

極めて堅く締まった層。俗に言う“牛の糞ローム”にあたると考えられる。層中には白色の粒子が多量に認められるほか、オレンジ色のパミスも中量混入している。層は、水分、粘性ともに殆ど認められず、風化するとひび割れが顕著である。この層からは、ｄ区において集石遺構が１基検出されたほか、ｂ・ｃ区からは遺物が多量に出土した。

第Ⅵ層暗褐色ローム層（10YR 3/3）

極めて堅く締まった層。層中には、Ⅴ層からの白色粒子が中量含まれ、他にガラス質の粒子と直方体の黒色粒子をそれぞれ少量混入している。層はやや湿っており、粘性に富む。層下部の断面はまだら状になる。遺物は多量に出土したが、それは層上部までである。本遺跡で検出された集石遺構の多くはこの層にあたり、この面が当時の生活面であったことを窺わせる。

第Ⅶａ層：褐色ローム層（7.5YR 4/4）

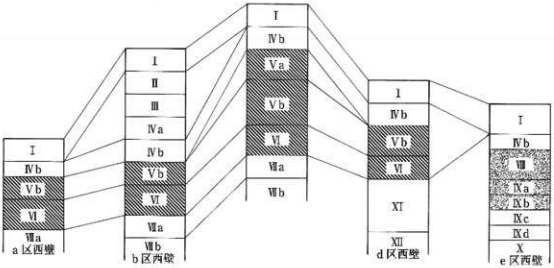
Ⅴ層ほどではないにしろ、Ⅵ層よりも堅く締まっている。断面はまだら状である。層は、白色粒を多量、ガラス質粒子を中量、オレンジ色の軟質粒子を少量、直方体の黒色粒子を微量混入する。粘性に富む。

第Ⅶｂ層：小林降下軽石層（7.5YR 4/4）

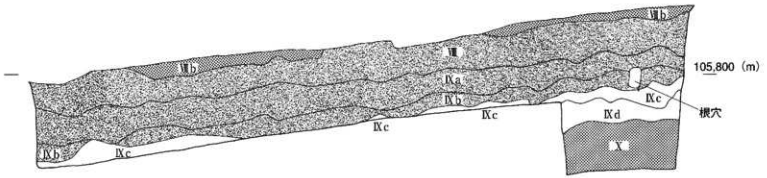
非常に堅く締まった層。やや湿っており、粘性は皆無である。層中には、オレンジ色の軟質粒子が多量、ガラス質粒子が中量、黒色粒子が少量見られる。

第Ⅷ層：褐色ローム層（10YR 4/4）

堅く締まった層。断面はややまだら状であり、層中には火山ガラスが少量含まれる。層はやや湿り、粘性に富んでいる。ｃ区では、この層からⅨｂ層にかけて、旧石器時代と考



第 4 図　調査区土層柱状模式図



第 5 図　e 区西壁土層断面図（1／80）

えられる遺物が出土した。

第Ⅸａ層：黄褐色ローム層（10YR５/６）

上層や下層に比べ、遥かに軟質の層である。断面はまだら状であり、その傾向は層下部にいくほど顕著となる。この層には火山ガラスが多く含まれるほか、白色粒も少量ながら認められる。ローム層とＡＴ層の漸移層にあたり、ｅ区は丘陵の崖面直下にあたるため、丘陵頂部のＡＴ層が流入した結果、このように多くの漸移層が形成されたものと考えられる。

第Ⅸｂ層：褐色ローム層（10YR４/４）

水分をやや含むが、粘性は殆どない。層中には白色粒子が多量に含まれるほか、直方体の黒色粒子が僅かに含まれるが、特徴的なのは火山ガラスであり、極めて多量に混入する。層は堅く締まっており、断面はまだら状の斑紋が顕著である。この層を最後に、遺物の出土は認められない。

第Ⅸｃ層：明黄褐色ローム層（10YR６/６）

層中には大小さまざまな軽石片が混入するほか、火山ガラスは大量に認められる。また極めて軟質であり、粒子は粗く、粘性は皆無に等しい。こうした特徴はⅨａ層、Ⅸｂ層に比べ、Ｘ層の影響が強いためと考えられる。断面はややまだら状である。

第Ⅸｄ層：明黄褐色ローム層（2.5Y７/６）

Ⅸｃ層よりも更に軟質であり、黄色味がかった層である。層中には大小の軽石片が多く混入しており、火山ガラスも極めて多量に認められる。層は湿っているものの、粘性は全くない。上層からのつながりか、微かにまだら状である。

第Ｘ層：姶良丹沢火山灰（シラス）層（2.5Y７/４）

プライマリーなＡＴ層である。水分を多く含むものの、粘性は全くない。層中には大小の軽石片が混入するものの、Ⅸｃ層、Ⅸｄ層ほどではない。火山ガラスは極めて多量の混入を示す。まだら状の斑紋は、この層では全く見あたらない。風化すると白色に変色し、砂状となる。

第ＸⅠ層：礫層

拳大から親指大の礫が堆積する層。礫と礫の隙間は、軟質の砂利を含んだ粘土層が混入する。構成する礫は、砂岩とチャートが多い。このうちチャートは節理面が多く、石器製作に向かないものばかりであるが、調査区から出土した石器の中には、このチャートを用いたものも多い。

第ＸⅡ層：宮崎層群

宮崎平野の基盤をなす層である。青灰色を主とした砂岩や粘板岩が何メートルにもわたって厚く堆積しており、上部は風化のためか幾分軟質であるが、下部にいたっては非常に硬質である。

第3節　各調査区の概要

a区

鹿村野地区から谷を隔てた椎屋形地区に向かう道路に接した地点に位置する。地区内の北東側に向かって緩やかに傾斜しており、調査区の東側から集石遺構が3基、ピットが1基検出されたほか、西端には礫群が分布していた。この礫群を除くと、その下層より4基の集石遺構が検出された。遺物の出土はごく稀である。なお、a区の東側には、ズクノ山第2遺跡のD地区が隣接している。

b区

a区の南西側にあたる。この地点もa区と同様に、北東側に傾斜しているが、角度はa区よりもやや急である。調査区内の東側からは、遺物の出土は希薄であったが、西側は、ほぼ全面にわたる礫群の広がりが確認された。更に、礫群の下位には集石遺構が18基、土坑が9基検出された。b区から出土する土器は、押型文土器と、桑ノ丸式土器が殆どであった。なお、1点ではあるが塞ノ神式土器も出土している。

c区

a区よりつながる傾斜面の最も上部にあたる。アカホヤ火山灰層の上面からは、径20cm前後の柱穴が確認されたが、明確なプランは特定できず、また検出面が既に削平されていたため、時期に関しても不明確であった。

調査区の西側には、他の調査区では確認されなかったⅤa層の分厚い堆積が見られる。b区に接する地点からは、b区で確認された礫群の継続が見られたほか、これを除くと5基の集石遺構が検出された。これ以外にも、c区からは3基の集石遺構と、1基の土坑が検出されている。遺物はb区と同様、早期中葉の土器群が出土している。

d区

丘陵部頂部より東側に位置し、東側に大きく傾斜した斜面上に位置する。

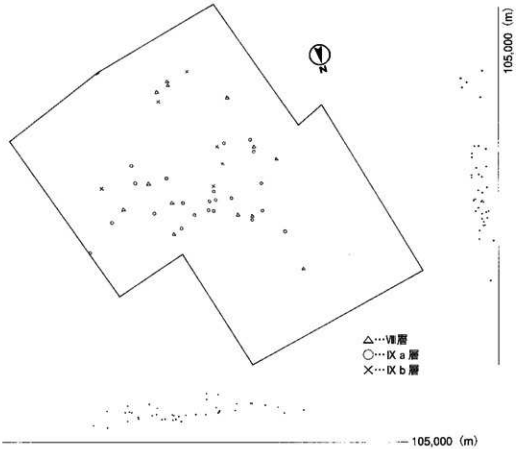
このうち、東側にあたる一段下の調査区は、削平により包含層の残存状況が悪く、早期後葉の平椎式と共に、集石遺構1基が検出されただけであった。

西側にあたる段の上からは、遺構は確認されなかったものの、多くの遺物が出土した。出土土器は、早期の円筒条痕文系土器や、平椎・塞ノ神式土器など、b・c区では殆ど見られない時期のものが多い。

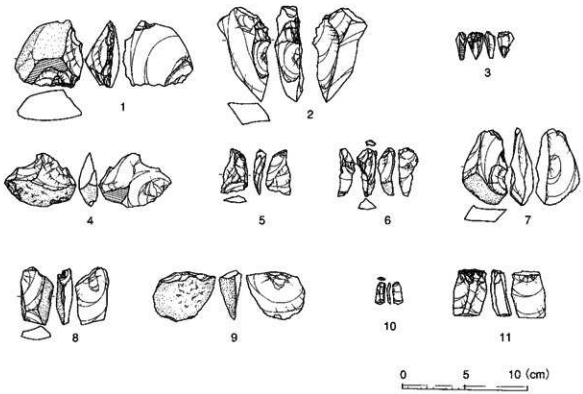
e区

丘陵の南東側に位置し、南東に向け大きく傾斜する斜面上に位置していた。この地点は、耕作土層より縄文時代後期の遺物が確認されたほか、弥生時代の土器も1点採集されており、包含層は消失していたものの、縄文時代早期以降も営続していたと考えられる。

また、耕作土層の下位は縄文早期遺物包含層であるⅥ層まで完全に消失していたが、更に下層から、旧石器時代の石器群が確認された。これらは殆ど同一個体であるが、出土遺物中の石製品の割合は低い。



第6図　e区旧石器時代遺物分布図（1／100）



第7図　出土遺物実測図

第4節　旧石器時代

旧石器時代の遺物は、Ⅷ層からⅨb層に渡って出土した。包含層出土の石器は41点に上る。石材は、1点を除く全てが黒色のホルンフェルスを用いたものであり、接合資料はないものの、全て同一母岩であると考えられる。なお、c区の縄文時代早期包含層から出土した石器のうち1点は、その形態や剥離の方向より旧石器時代の遺物である可能性が高いと考え、ここに図示した。

なお、出土遺物は石製品に乏しく、一部二次加工を行うものがあるが、多くは剥片類に属する。また、剥片に残された剥離面の観察により、明確な剥片剥離技術を窺い知ることは出来ない。

（1）は、礫面付近の肉厚な剥片をバルブカットした後に、末端部に刃部調整を行ったスクレイパーである。刃部は鋸歯状になっているが、剥片は連続的ではない。

（2）は、不定方向から剥離を行った石核より作出された厚手の剥片の片側縁に剥離を行った二次加工剥片である。二次的に行われた剥離は、角度や剥離の規模が一定していないため、スクレイパーの刃部調整とは考え難い。

（3・4）は二次加工剥片である。（3）は不定方向から剥離された石核より生じた剥片の一端に連続的な調整を加えたものである。二次的な調整は剥片の裏面にも行われているが、調整の意図は不明確である。（4）は打面転移を行った石核から作出された剥片の一端に小規模な調整を行ったものである。

（5～9）は二次的な調整を行わない剥片である。（9）は礫面除去の際に剥離されたものである。（7）は、打面と底面が明確に設定され、平行四辺形状の断面形を呈す。これは、横長剥片を連続的に剥離しようという意図が窺える。（5・6・8）は表面には、いずれも顕著な打面転移の痕跡が認められる。

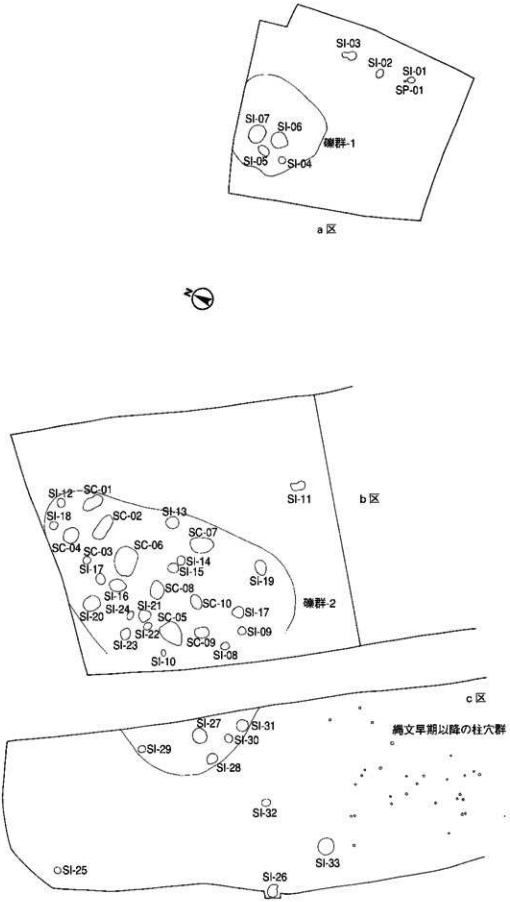
（10）は、c区のⅠ層下部より採集された細石刃である。表面には縦長の剥片を何度も剥離した痕跡が認められ、連続的な細石刃剥離作業が行われたことを示している。下部は折損しているが、これが意図的なものかどうか判別しがたい。チャート製である。

（11）は、c区からの出土である。表面、裏面の打撃方向が一定しているほか、チャートや黒曜石を用いた石器が大半を占めるc区出土にしては珍しいホルンフェルス製であることから、旧石器時代の遺物であると判断した。連続的な縦長剥片剥離作業を行った石核から作出されたものであり、上部には頭部調整が密に行われている。

第5節　縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は、a～d区から検出された。

遺構は、a～c区にかけての斜面上に集中が認められるほか、d区の斜面上にも、遺構は確認されなかったものの、遺物が出土した。内容は、礫群2基、集石遺構34基、土坑10基、ピット1基である。



第8図　a～c区遺構配置図（1／500）

Ⅰ・礫群

礫群は2基検出された。

礫群1

a区の北側にて検出された。面積は118㎡である。礫は20～30cmの厚さで堆積しており、これを取り除くと、下位に集石遺構が4基検出された。礫群の周辺には、礫の分布は極めて稀な状況である。遺構内からの炭の検出は、ＳＩ－07の上部以外は希薄であった。

礫群2

b区南部は礫の分布は確認されないが、これは開墾により削平を受けたもので、本来はb区とc区にまたがっていたと考えられる。面積は800㎡と大型であり、礫は40cm前後の厚さで堆積していた。この下位からは、集石遺構が22基、土坑が7基検出された。礫群1とは異なり、礫群2は遺構の周辺からも礫が多く検出されており、遺構の範囲が判別し難い。礫の平面的な広がりではなく、礫の堆積の厚さを重視し範囲を認定した。遺構内からは、炭が多く認められ、特に集石遺構の上部は顕著であった。

これら礫群を構成する礫は、集石遺構と同様に角礫が多い。

Ⅱ・集石遺構

集石遺構は34基検出された。a区で7基、b区で18基、c区で9基である。

（ＳＩ－01）

a区東南部において、ＳＰ－01に隣接して検出された。検出面はⅥ層上部である。82cm×85cmの範囲に、大ぶりの角礫の集合が見られる。更に礫の下位には、70cm×75cm、深さ約20cmの不正円形を呈する土坑が確認された。

（ＳＩ－02）

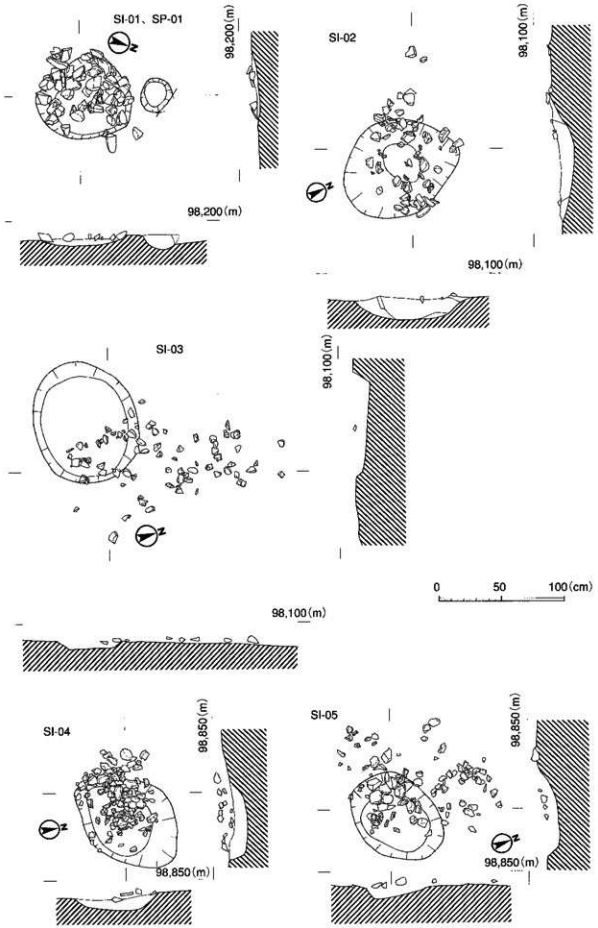
a区東側のⅥ層上部より検出された。80cm×105cmの範囲内に、角礫が確認された。ただし、礫の分布には明確な集中は認められない。礫の下位には、80cm×100cm、深さ15cmの土坑が検出されたが、土坑中に礫は混入しない。また、礫の範囲と土坑は、中心は重なるものの、プランは異なる。

（ＳＩ－03）

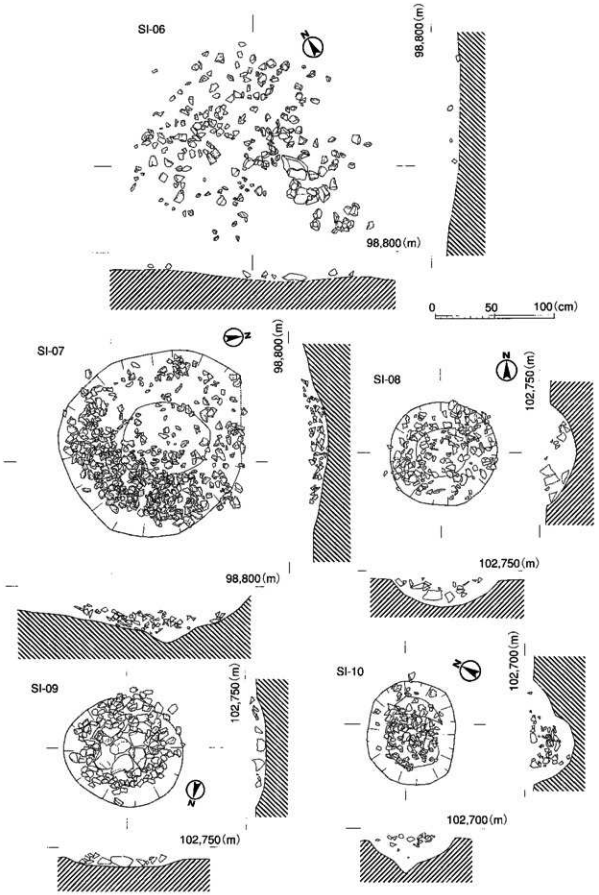
a区東部のⅥ層上部より検出された。180cm×80cmの広い範囲に礫が分布するが、礫はまばらであり、また小ぶりの礫ばかりで構成されている。下位には、100cm×80cm、深さ15cmの楕円形を呈する土坑が検出された。土坑の覆土に礫は含まれず、プランは礫の分布と一部しか重ならない。

（ＳＩ－04）

a区北西部のⅥ層下部より、礫群1を除去した下層より検出された。80cm×70cmの範囲内に礫が集中しており、その密集は中央部ほど顕著である。礫の下位には、100cm×70cm、深さ20cmの土坑が検出された。土坑中に礫の混入は認められない。なお、土坑は礫の集中部より、ややずれた位置にある。


SI-01、SP-01
98,200(m)
98,200(m)
SI-02
98,100(m)
98,100(m)
SI-03
98,100(m)
98,100(m)
0
50
100(cm)
SI-04
98,850(m)
98,850(m)
SI-05
98,850(m)
98,850(m)

第９図　検出遺構実測図



第10図　検出遺構実測図

（S I －05）

a区北西部より、礫群1を取り除いたⅥ層下部より検出された。130cm×90cmの範囲内に礫が多く分布する。礫の下位には80cm×60cm、深さ10cmの不正円形を呈する掘り込みが確認された。礫の集中と掘りこみにはずれが見られるが、掘り込み上部は礫が大ぶりとなる。

（S I －06）

a区北西部の、礫群1の下位より検出された。検出面はⅥ層下位である。210cm×160cmの範囲内に大小の礫が分布するが、集石遺構としては比較的疎らな状態である。礫の分布に重なる状態で浅い窪みが確認されたが、プランが確認できるほど明確な状態ではなかった。

（S I －07）

a区北西部、礫群1を除去したⅥ層下位より検出された。150cm×150cmの範囲内に礫が集中する。遺構を構成する礫は小ぶりのものが多い。下位には径160cm、深さ30cmの掘り込みが検出された。礫の集中と掘りこみはほぼ重なる。掘りこみの覆土は礫が多く混入するほか、炭も多く確認された。

（S I －08）

b区西部のⅥ層下部より検出された。開墾時の削平により、遺構上部やその上部に存在したと考えられる礫群2は喪失したと考えられる。土坑は径90cmの円形を呈する。土坑の覆土中から、大小の礫が確認された。

（S I －09）

b区西部のⅥ層下部、礫群2を除去した下位に確認された。90cm×90cmの範囲内に礫の集中が認められる。礫の分布は平面的であり、中央部は大ぶりの礫が用いられる。礫の下位には90cm×75cm、深さ15cmの掘り込みが検出された。

（S I －10）

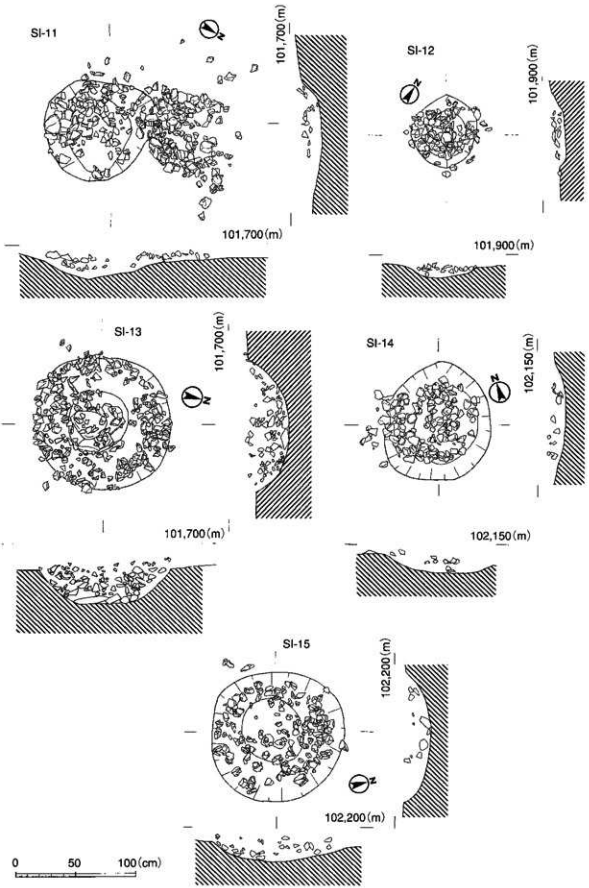
b区西部のⅥ層下位より検出された。開墾時に、集石の検出面が上部に存在したと考えられる礫群2ごと削平されている。掘りこみは85cm×55cmの一部段を設ける楕円形を呈する。覆土からは小ぶりの礫が掘りこみ下位まで確認されたほか、炭も多量に検出された。

（S I －11）

b区東南部、Ⅵ層中位より検出された。150cm×75cmの範囲内に礫が分布するが、礫の集中は2箇所に分かれる。礫の下位には径約90cm、深さ20cmの掘りこみが確認された。この掘り込みは、礫の集中のうち1箇所と重なる。また、覆土からも礫が多く検出された。

（S I －12）

b区の北東部にあたり、礫群2の下位、Ⅵ層下位が検出面である。礫の分布は50cm×60cmの範囲内であり、集石遺構としては本遺跡では最も小ぶりである。礫自体も小ぶりなものが多い。下位からは同じ範囲内に掘り込みが確認された。掘り込みの深さは15cm程であり、覆土中にも礫が混入していた。



第11図　検出遺構実測図

（ＳＩ－13）

ｂ区のほぼ中央部から検出された。遺構の上部には礫群２があり、検出面はⅥ層の底面付近である。礫は径約110cmの範囲で集中しており、下位に同じ大きさで円形を呈し、深さ25cmの掘り込みが確認された。礫は掘り込みの覆土からも多量に確認され、底面には大ぶりの扁平な礫が配置される。また、覆土からは炭が多量に検出された。

（ＳＩ－14）

ｂ区中央部付近において、礫群２の下位より検出された。検出面はⅥ層下位である。90cm×75cmの範囲内に、小ぶりの礫の集中が認められる。下位には100cm×90cm、深さ15cmの不正円形を呈する掘り込みを伴い、礫の分布は掘り込みの覆土からも確認される。

（ＳＩ－15）

ｂ区の中央部付近において、礫群２の下位よりＳＩ－14と隣り合って検出された。検出面はⅥ層下位である。100cm×85cmの範囲内に礫が分布する。礫は明確な集中を持たない。下位には径約110cm、深さ20cmの円形を呈する掘り込みを伴う。掘り込みの覆土にも礫の混入が見られる。

（ＳＩ－16）

ｂ区の中央部よりやや北側、礫群２の下位のⅥ層下位より検出された。礫は135cm×110cmと、広範な分布を見せる。下位には180cm×210cm、深さ15cmの不定形を呈する掘り込みを設け、覆土中にも礫が多く混入する。覆土中からは他に炭も確認された。なお、掘りこみの一端はＳＣ－06と接する。

（ＳＩ－17）

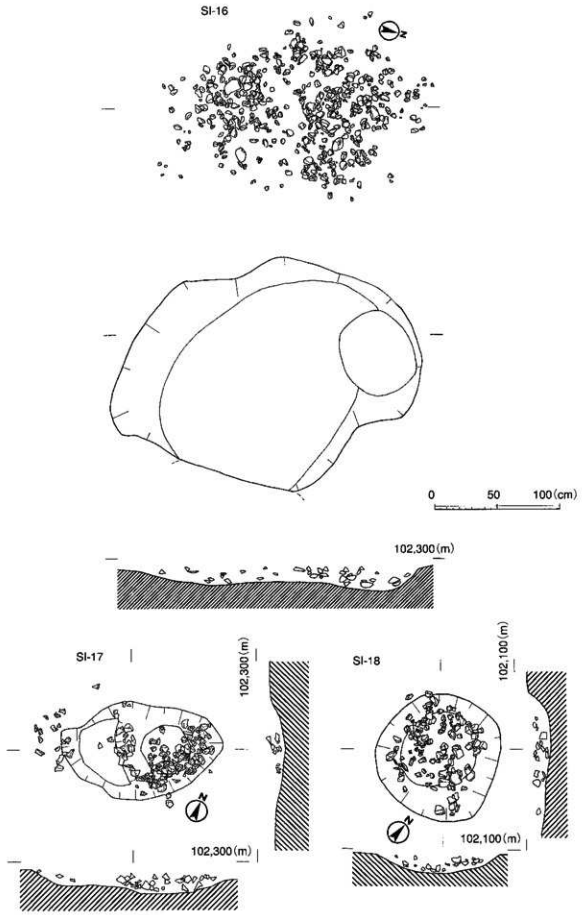
ｂ区南西側のⅥ層下位にて、礫群２を取り除いた下位より検出された。礫は85cm×60cmの範囲に分布するが、一端に集中する他は全体的に疎らである。下位には130cm×85cm、深さ15cmの楕円形を呈する掘り込みが確認された。この掘り込みは一方に浅い段を持つ。礫は掘りこみの深い部分に集中する。

（ＳＩ－18）

ｂ区の北部にて、礫群２の下部より検出された。検出面はⅥ層下位である。礫は100cm×80cmの範囲に分布しているが、明確な集中は見られず、全体的に疎らである。下位に105cm×100cmの掘り込みが検出され、礫の混入は覆土中からも確認された。

（ＳＩ－19）

ｂ区南側より、礫群２を除去したⅥ層下位で検出された。礫は180cm×130cmの範囲内に分布する。礫は全体的に小ぶりのものが多い。礫を除くと、長軸130cm、短軸100cm、深さ30cmの楕円形を呈する掘り込みが確認された。掘り込みは長軸側一端が急に傾斜しており、もう一方の傾斜は緩やかである。また、掘り込みに含まれる礫は、傾斜の急な部分に集中している。なお、掘り込みの底面には、扁平で大型の礫が数個配置される。



第12図　検出遺構実測図

(ＳＩ－20)

ｂ区西部より、礫群２を除いたⅥ層下位より検出された。礫は径180cmの範囲で集中する。礫の下部からは190cm×165cm、深さ30cmの掘り込みが検出された。礫は掘りこみの覆土からも多く確認され、掘りこみの底面には数個の扁平な礫が配されていた。

(ＳＩ－21)

ｂ区北西部より、礫群２を除去したⅥ層下位より検出された。礫は140cm×125cmの範囲で密集しており、下部より長軸140cm、短軸120cm、深さ30cmのやや歪んだ楕円形の掘り込みが検出されたが、礫はこの覆土中からも多く確認された。覆土からは炭が多量に認められたが、掘り込みの底面付近には、扁平で大型の礫を数個配置されている。

(ＳＩ－22)

ｂ区北西部より、ＳＩ－21に隣接して検出された。検出面はⅥ層下位である。礫は125cm×140cmの範囲内に分布するが、明確な集中は径70cm程である。長軸80cm、短軸70cmのやや歪な楕円形の掘り込みを持ち、礫はその覆土にも含まれる。

(ＳＩ－23)

ｂ区北西部、礫群2を除去したⅥ層下位にて検出された。95cm×140cmの範囲内に大小の礫が密集しており、下部には90cm×140cm、深さ30cmの不定形な掘り込みを伴う。礫は、掘り込みの覆土からも多く確認されており、底面付近には、数個の扁平な礫が配される。

(ＳＩ－24)

ｂ区北側の、集石遺構が集中する地点より、礫群２を除いた下部から検出された。検出面はⅥ層下位である。105cm×70cmの範囲内に礫が分布する。礫は小ぶりのものが多く、また明確な密集は認められない。下位には100cm×80cm、深さ15cmの掘り込みを伴うが、掘り込みの覆土からも礫は多く検出された。

(ＳＩ－25)

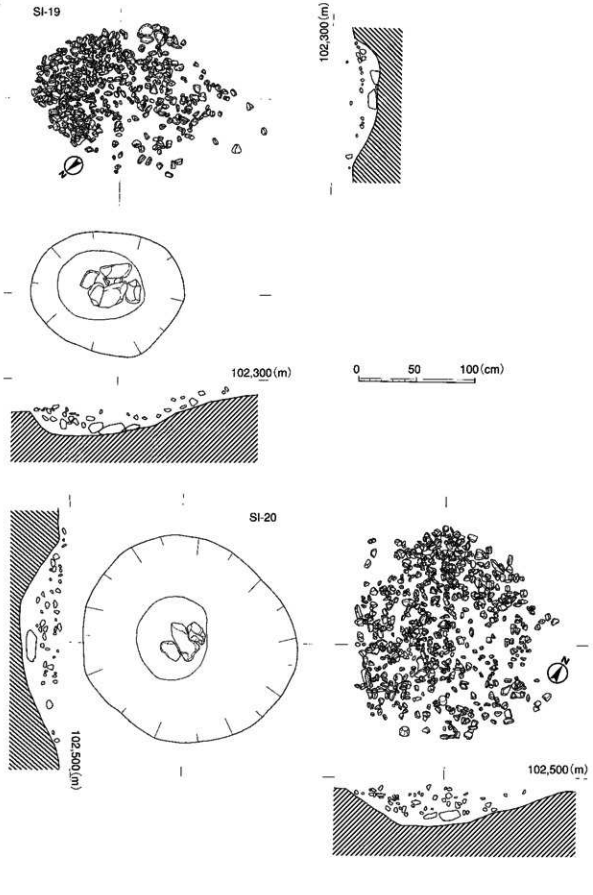
ｃ区北西部より検出された。検出面はⅦ層中部であるが、これは削平により削平が行われたためであり、実際は他と同様にⅥ層中であったと思われる。80cm×55cmの範囲内に礫が分布するが、その中には大ぶりの礫で構成される部分と、小ぶりの礫で構成される部分に二分される。遺構は長軸100cm、短軸85cm、深さ30cmと、礫の集中よりも一回り大型になる掘り込みを伴うが、礫の出土は掘り込みの上部までである。

(ＳＩ－26)

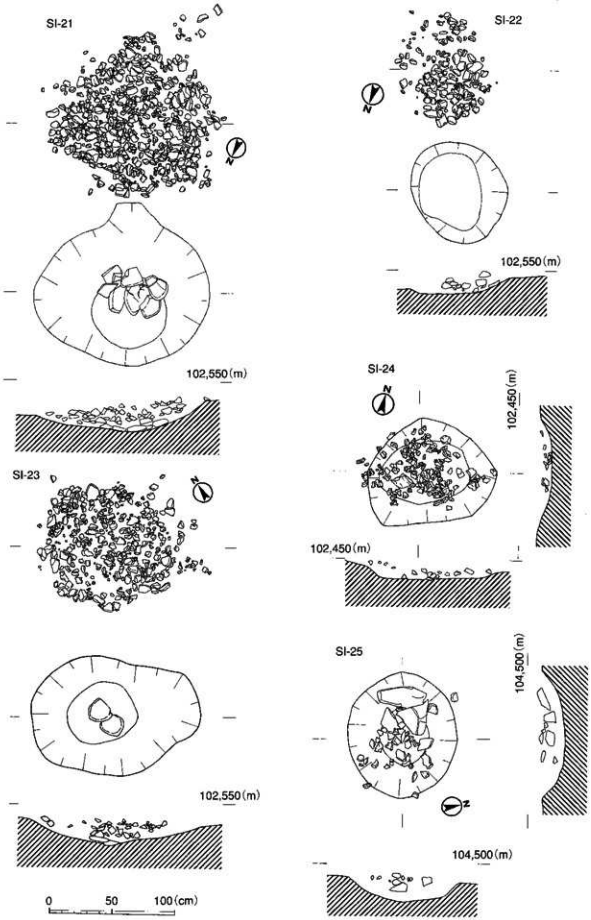
ｃ区西端、調査区の境界部において検出された。検出面はⅤｂ層上位である。径110cmの範囲内に礫が集中しており、140cm×130cmのやや歪な楕円形の掘り込みを持つ。掘り込みは一端の傾斜が急であり、もう一端は緩やかである。礫の集中は、急な傾斜側より顕著である。なお、礫の検出は掘り込みの内部にも認められ、底面には扁平の礫が数個配置されていた。

(ＳＩ－27)

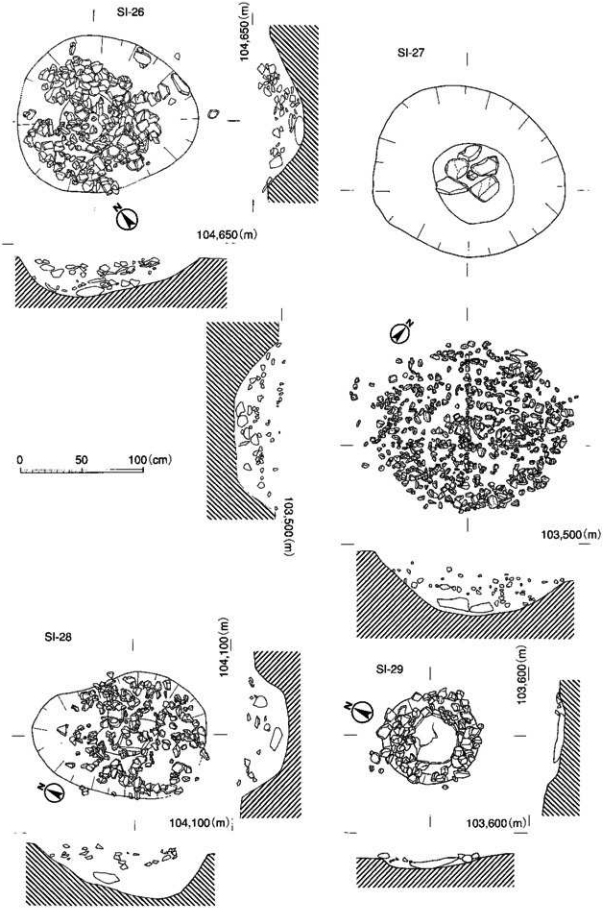
ｃ区の東側にて、礫群２を除いた下部であるⅥ層中位より検出された。160cm×140cmの



第13図　検出遺構実測図



第14図　検出遺構実測図



第15図　検出遺構実測図

楕円形の範囲内に、小ぶりのものを主体として礫が集中していた。礫の下位には、ほぼ同じ大きさの掘り込みを伴う。掘り込みの深さは60cmと深く、礫は掘り込み内からも多数検出された。他に、覆土中に炭も多く認められた。底面には、扁平な礫が数個配置される。

(S I -28)

c区の東側に位置し、礫群2の下部であるⅥ層中位より検出された。120cm×100cmの範囲内に礫が分布するが、全体的に疎らである。下位には長軸140cm、短軸100cm、深さ50cmの掘り込みを伴う。掘り込みの断面は一端の傾斜が急であり、もう一端が緩やかである。礫は掘り込みの中にも認められるが、底面付近には礫は含まれない。また、掘り込みから比較的扁平な礫が数個確認されたものの、まとまりは見られない。

(S I -29)

c区東側、礫群2の下位より検出された。検出面はⅥ層中位である。径85cmの範囲内に礫が集中する。下位には70cm×80cmの掘り込みが検出された。底面に扁平な大型の礫が1個配され、小ぶりの礫が巡る格好である。

(S I -30)

c区東側、礫群2の下位より検出された。検出面はⅥ層中位である。径90cmの範囲に礫が集中しており、下位には長軸100cm、短軸90cm、深さ25cmの掘り込みが設けられる。礫の分布は掘り込みの内部にも認められる。礫は小ぶりのものが多い。

(S I -31)

c区東側において、礫群2を除いた後に検出された。検出面はⅥ層中位である。下位の掘り込みの有無に付いては不明である。

(S I -32)

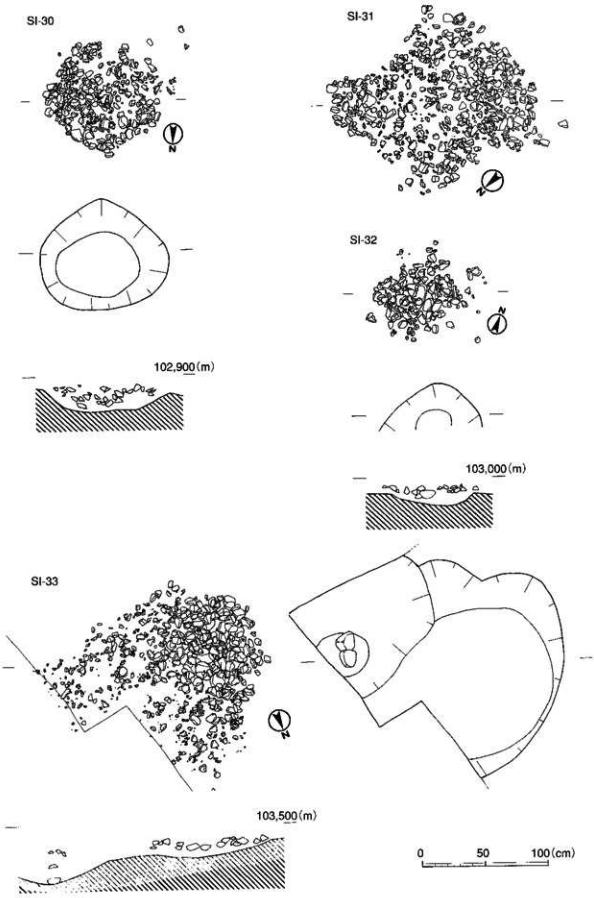
c区中央部付近より検出された。検出面はⅥ層中位である。径約80cmの範囲内に礫の集中が見られる。礫は範囲の中央部付近になると比較的大ぶりのものが多い。下位には長軸85cm、深さ20cmの掘り込みが確認されたが、礫は掘り込みの上部までに留まる。

(S I -33)

c区西側の、確認トレンチ内より検出された。検出面はⅥ層下位であるが、この周辺はⅤb層堆積が厚いため、付近のS I -26とは、高さにして1m近くも差がある。トレンチ内で確認されたため、礫の分布範囲は正確には不明であるが、径は150cmを超えると思われる。うち南西側の径80cmの範囲に、比較的大ぶりの礫が集中する。下位には段を設ける掘り込みが確認された。最も深くなる部分には、数個の扁平な礫が配されていた。

(S I -34)

d区から検出された唯一の遺構である。D区の北東部の緩傾斜面より、径170cmの範囲内において礫の集中が確認された。検出面はⅤb層上位である。下位には180cm×150cmのやや歪な掘り込みが設けられるが、深さは20cmと、本遺跡の他の集石遺構に比べ比較的浅めである。付近の同層位より平椎式が出土しており、この遺構もその時期のものであると考えられる。



第16図　検出遺構実測図

Ⅲ・土坑

土坑は全体で10基確認された。いずれもB区からの検出である。

（ＳＣ－01）

ｂ区北部より確認された。検出面はⅥ層下位である。長軸220cm、短軸120cmの楕円形を呈する。最深部は約50cmであり、遺構の北西側にやや偏っている。断面形は、北側に向かって急激に立ち上がるが、南側は段を持った後、緩やかに傾斜するのみである。覆土中には土器などの遺物に加え、礫も含まれるが、量的には疎らであり、集石遺構と呼べるほどの密集ではない。

（ＳＣ－02）

ｂ区北部より、ＳＣ－01と並ぶように確認された。長軸は400cmと長く、幅は最も広がる地点で120cmである。断面形は南東側が最も深くなり、北西側に向かって２段高くなった後、北西の端部で一段深くなる。深さは南東側で50cm、北西側で30cmである。覆土中には礫が混入しており、特に北西側において多く確認されたが、集石遺構ほどの明確な集中は認められない。なお、北西側の土坑の外側には、礫が集中する部分が確認された。構成される礫の数は20に満たず、掘り込みや炭等も確認されなかったため、集石遺構ではなく、ＳＣ－02に関連したものであると判断した。

（ＳＣ－03）

ｂ区北部より、礫群２を除去したⅥ層下位にて検出された。径約100cmのやや歪な円形のプランを呈しており、深さは15cmと浅い。土坑の上部には径50cmの範囲内に礫が確認され、範囲の中央部には大ぶりの礫が確認されたものの、土坑の覆土までは礫が認められず、また明確な集中も認められないことから、土坑として認定するに至った。

（ＳＣ－04）

ｂ区北部より、礫群２を取り除いたⅥ層下位にて検出された。径約200cmの不定形なプランであり、深さは20cmと浅い。遺構の覆土中からは小ぶりの礫が径約150cmの範囲にわたって確認された。礫の検出は覆土の上層のみに限られることから、集石遺構ではなく土坑とした。なお、覆土中からは炭も確認されている。

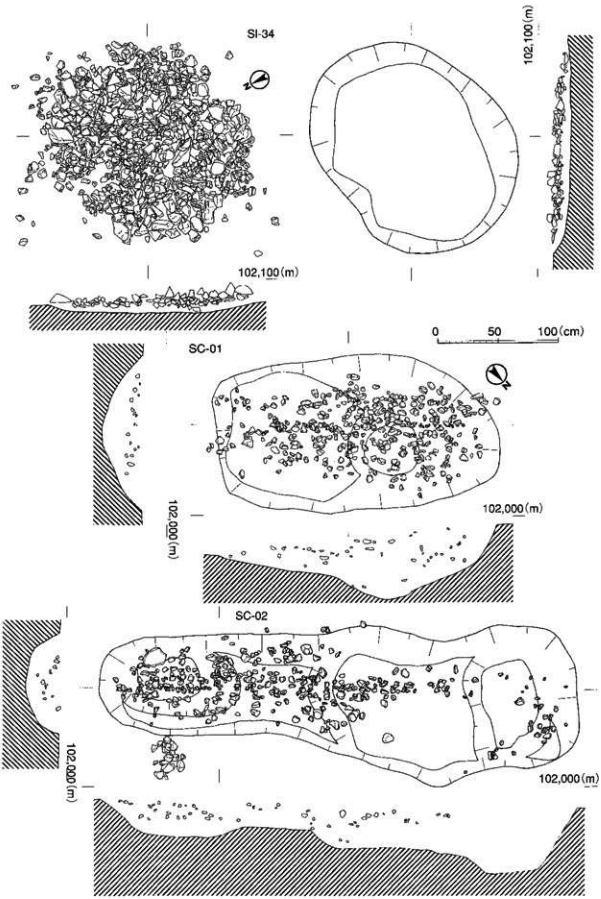
（ＳＣ－05）

ｂ区西部より、礫群２を除いたⅥ層下位より検出された。300cm×200cmの不定形な形状を呈し、一方が深くなり段が設けられる。最も深くなる径約150cmの円形の落ち込み部は礫が比較的密集するが、掘りこみの覆土上部に留まる。覆土中からは、炭も多量に認められた。

（ＳＣ－06）

ｂ区のやや北側より、礫群２を除いたⅥ層下位を検出面として確認された。本遺跡で最も規模の大きな遺構である。400cm×300cmの不定形な形状を呈する。また、深さ100cmを超える最深部は平坦面があり、深さ70cmのところに段を設ける断面形である。

覆土中には、主に小ぶりの礫が含まれたが、全体的には疎らであった。



第17図　検出遺構実測図

（ＳＣ－07）

ｂ区の中央部付近より、礫群２を除去した下位にて検出された。201㎝×220㎝の不定形なプランで、深さは40㎝である。覆土中からは多数の礫が混入していたが、集石遺構ほどの密集度は確認されなかった。

（ＳＣ－08）

ｂ区のやや西側より、これも礫群２の下層より確認された。検出面はⅥ層下位である。220㎝×180㎝不定形なプランであり、深さは約40㎝である。覆土中には小ぶりの礫が多く認められたほか、炭も検出されている。礫にまとまりが見られないため、土坑と判断した。

（ＳＣ－09）

ｂ区の西部より、礫群２を除去した下位より検出された。150㎝×130㎝の、やや歪な楕円形を呈し、深さは20㎝程である。覆土中からは礫は殆ど混入しておらず、また炭も確認されなかった。

（ＳＩ－10）

ｂ区西部より確認された。検出面は、Ｂ区で確認される多くの遺構と同じⅥ層下位であり、130㎝×90㎝の楕円形を呈す。約30㎝に至る覆土中からは、他の土坑で確認されるような礫や炭は、全く認められなかった。

Ⅳ・ピット

ピットの検出は1基のみである。

（ＳＰ－01）

ａ区より、ＳＩ－01に隣接する形で確認された。直径20㎝程であり、深さも約20㎝である。覆土中には、炭の欠片が多量に含まれており、ＳＩ－01を使用した際に生じた炭を埋めたものと考えられる。

Ⅴ・柱穴群

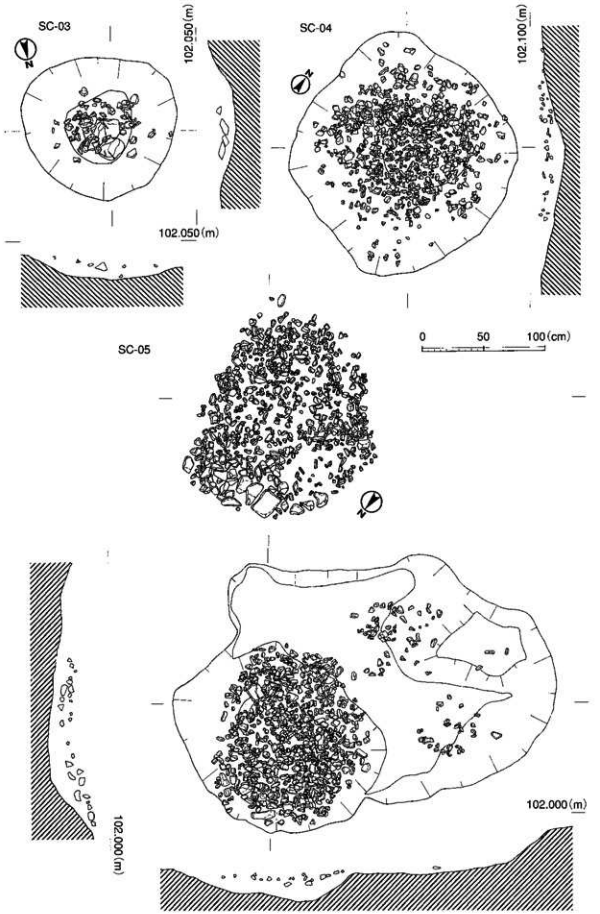
ｃ区より検出された。検出面が既に削平を受けていたため、構築された時期は不明であるが、全体で29基検出された。径は15～20㎝程度であるが、深さは30㎝に達する。覆土は黒色であり、本遺跡の基本土層に照らせばⅢ層に類似するため、少なくとも縄文早期以降のものである。柱穴は散在するような状態でまとまりに乏しく、建物としてのプランを確認するには至らなかった。

第６節　縄文時代の出土遺物

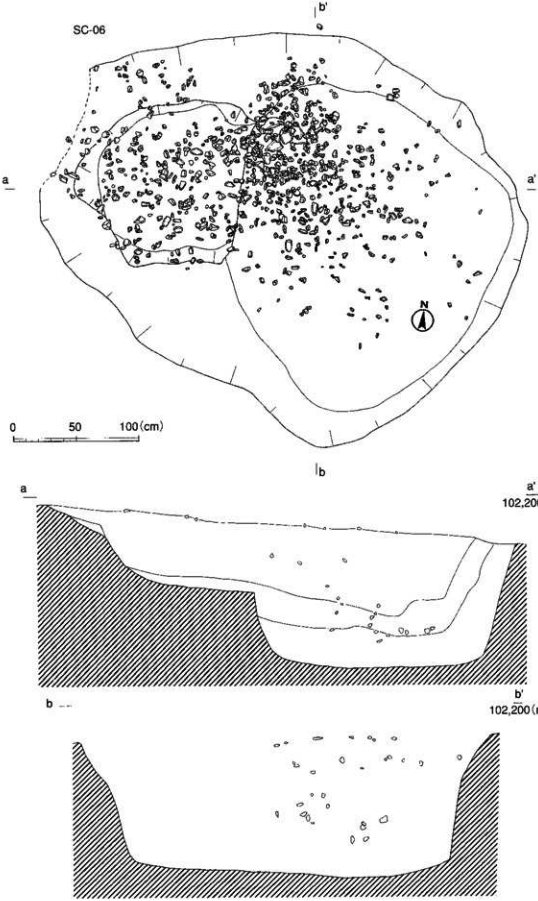
縄文時代の遺物としては、土器、石器が出土した。

Ⅰ・縄文時代早期の土器

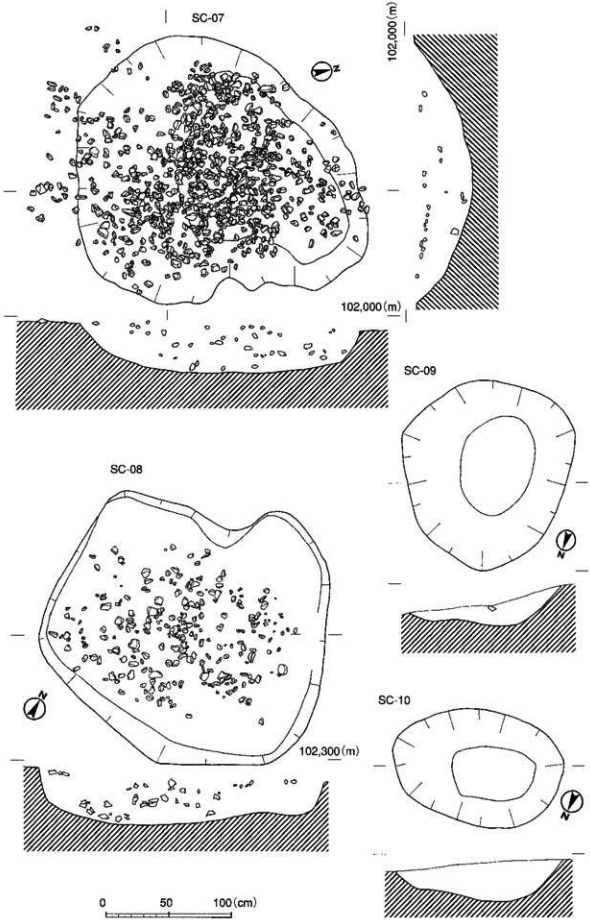
遺跡内で出土した土器は、その殆どが縄文時代早期に属するものである。これらは、Ⅰ類～ⅩⅡ類に分類が可能である。以下、分類毎に説明を加える。



第18図　検出遺構実測図



第19図　検出遺構実測図



第20図　検出遺構実測図

Ⅰ類：円筒形を呈する、器壁の薄い土器（12～15）

（12）は、口縁部に貝殻腹縁による刺突を行った後に楔形突起が2段にわたって貼り付けられたものである。口唇部には浅い刻みが施文され、内面は縦方向の粗いナデによる調整が行われる。楔形突起は（14）にも認められるが、こちらには貝殻腹縁刺突は行われない。（13）は貝殻腹縁刺突が、（15）は半竹管状工具刺突が縦方向に行われたものである。これらⅠ類に属する土器は、いずれも器壁が薄く作られている。

Ⅱ類：条痕文を施した土器（16～21）

（16）は、口縁直下に、工具によると思われる太い連点が2列に渡って行われたもので、その下位には太い条痕文が、深く刻まれる。また、口唇部にも刻目が施文されている。（17）は、口縁部に縦位の貝殻腹縁による刺突が一列巡り、下位に浅い条痕が施文される。施文順序は条痕→刺突となる。（18）は、斜位の刺突が、（19）は斜位の押引きが行われる。この2点の施文順序は条痕が先である。（19）の条痕は、二枚貝を用いたものと考えられる。（20）は口縁直下に刺突や押引き等は行われない。口唇部は内面に向かって傾斜する。

Ⅲ類：桑ノ丸式土器（22～51）

Ⅲ類は、3種に細別が可能である。

Ⅲa類：短沈線による羽状文を施した土器（22～36）

（22）は、横位の、羽状の短沈線が外面の全面に施文される。（23）は、口縁直下に無文帯があるものの、基本的には（21）と同様の文様構成である。（24）は、口縁直下に2条の沈線が横位に巡っており、その下位に短沈線を施す。（25～31）は、叉状の工具を用い、数本単位で施文を行ったものである。施文工具に着目すると、（26・27）は一本が太く、それ以外は細かな工具が使用され、（27～29）は先が三叉状に分かれる。（25・31～35）は先が細かく分かれており、（36）は先の平たい工具が使用される。

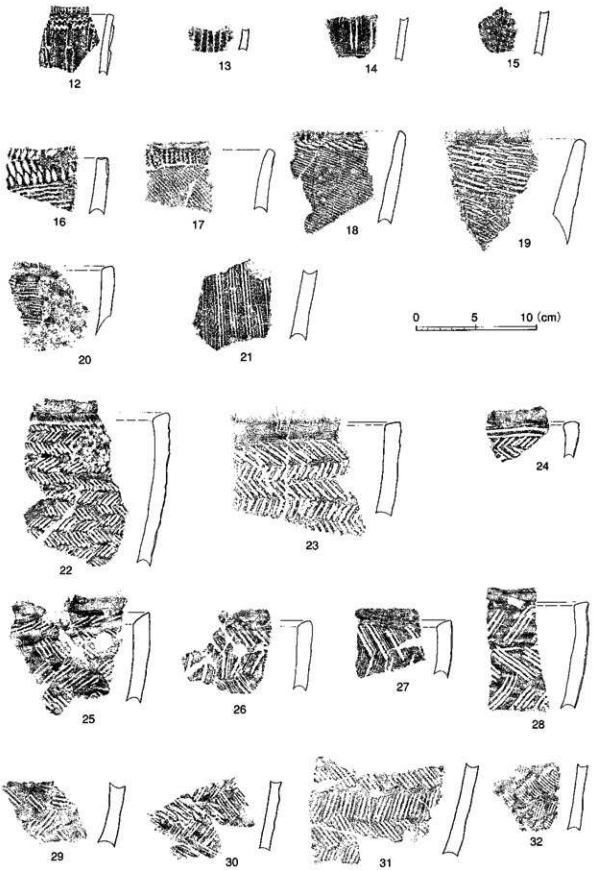
Ⅲb類：曲線文を施した土器（37～47）

（37）は、叉状の工具により、曲線が垂下する文様を主文様とする土器である。（38～39）は、垂下する曲線のみで構成されるが、（40）は、曲線の間を埋めるように短沈線が施されるほか、（41）は、口縁直下に横位の線が一列巡る。（42・43）は曲線が幾重にも重なる。（44・45）は、曲線の間隔が小さく、粗雑な印象を受ける。（46・47）は、曲線を全面に、幾重にも施文している。この分類に属する他の土器とは、文様構成が大きく異なるが、曲線文であると言う点で含めた。ただし、Ⅲ類の土器は、外面が茶褐色から黒褐色に近い色調を呈する土器が多い中で、この2点のみ赤褐色に近い色調である。

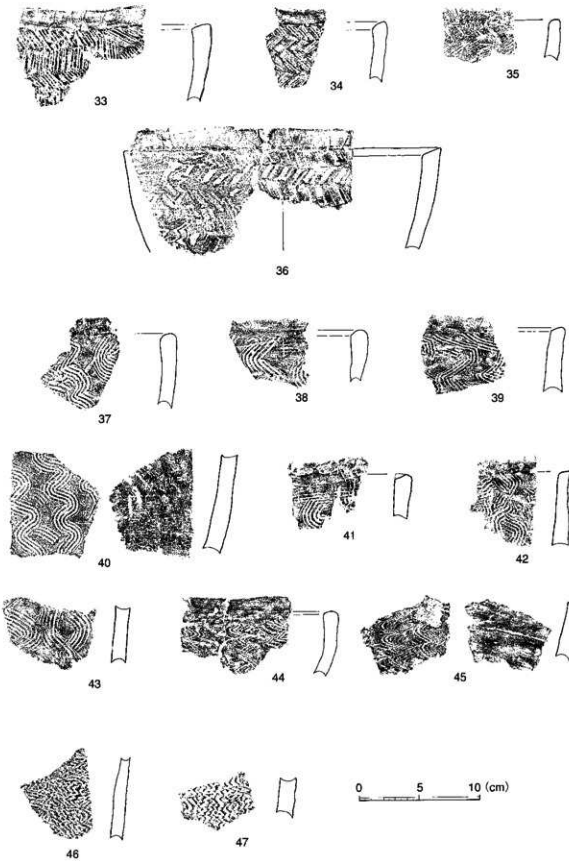
Ⅲc類：様々な文様を併用する土器（48～51）

これらは全て同一個体である。全面に渡って、主に叉状の工具による短沈線が施文されるが、それに先んじて口縁から垂下する沈線も確認される。これらの文様を施文したのち、外面は丁寧に磨かれる。

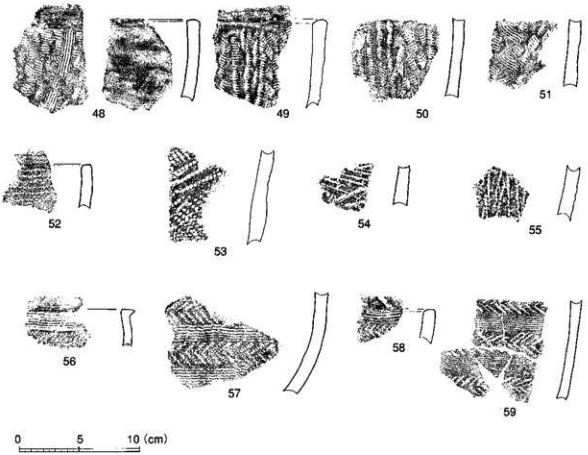
これらⅢ類に属する土器は、いずれも口唇部が内面に傾斜するほか、口唇部から内面の上部にかけて、ヘラ状の工具を用いケズリに似た調整を横位に行っている。また、器壁が



第21図　出土遺物実測図



第22図　出土遺物実測図



第23図　出土遺物実測図

やや厚手であり、口縁部付近で僅かに内傾する断面形を呈する。

Ⅳ類：下剥峯式土器（52～59）

2種に細別が可能である。

Ⅳa類：刺突文のみで構成された土器（52～55）

（52）は、横位の貝殻腹縁刺突を行う。口縁部断面形は、Ⅲ類に類似する。（53・54）は、横位に羽状の貝殻腹縁刺突を行ったものである。（55）は、それが縦位になったものである。Ⅳa類の土器は、Ⅲ類と同じく器壁がやや厚手になるが、外面の色調はやや赤みを帯びる。

Ⅳb類：刺突文と沈線が併用された土器（56～59）

羽状の貝殻腹縁刺突と、叉状の細かな沈線文が横位に繰り返される文様構成を行う。胎土は、長石が多量に含まれる。貝殻腹縁刺突と言う要素から、Ⅳ類に分類した。

Ⅴ類：押型文土器（60～183）

それぞれ、大別と細別を交えながら説明を行いたい。

Ⅴa類：山形押型文土器（60～132）

押型文土器は、施文方向よりも山形の幅を重視し、以下の2種に分類を行った。

Ⅴa類－1：山形が細かい土器（60～88）

（60～63）は、外面に横位の山形押型文が施文される。このうち（60）は、口縁の外反が弱く、浅く細かい文様が施文されるが、内面に原体条痕は使用されない。（61・63）にはそれが認められる。（62）の内面は無文である。

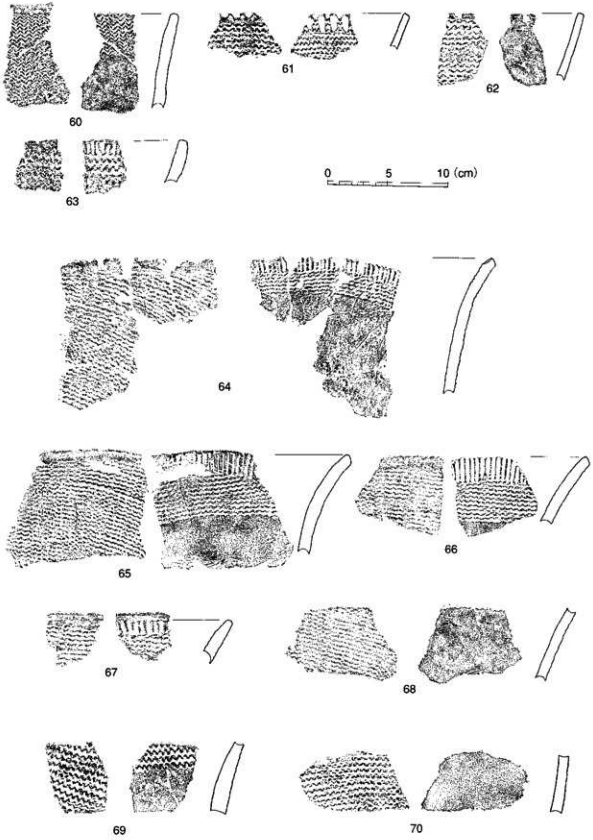
（64～70）は、斜位に施文されたものである。これらは、口縁部が残存しているものは、いずれも口縁部付近で大きく外反する器形を呈しており、内面には原体条痕が施文され、下位に外面と同じ文様が使用される。また、器面を観察すると、内外面共に何度も施文された痕跡を見ることが出来る。

（71～88）は、縦位ないしは複数の方向から施文されたものである。（71）は縦位の文様が施文されたものであり、器壁が厚く、口縁部断面形や、寸胴になる器形は、本遺跡でいうⅢ類のそれに近い。（72）は小型の土器であり、口縁部が厚手になり外反する。外面は上部が縦位に施文され、胴部より以下が横位になる。なお、口縁部には補修孔を認めることが出来る。

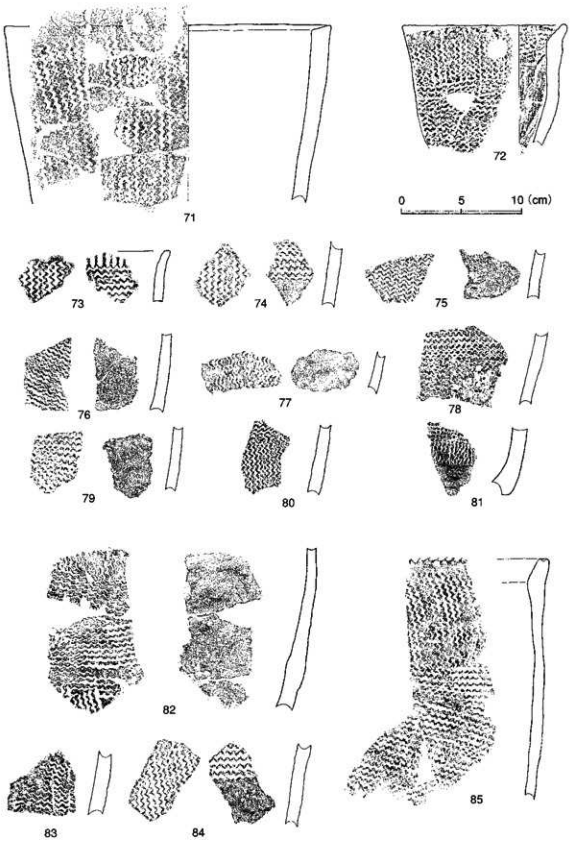
（73・74・77）は、外面が縦位に施文されたものである。（78・79）は、重ねて施文する過程で、施文方向が大きく変化したものである。（80～82・85）は、縦横に施文方向が分かれるものである。（81）は底部付近であるが、押型文を施文したのち、ケズリにも似た調整を行い、押型文がやや押し潰された格好になっている。

Ⅴa類－2：山形が大きい土器（89～132）

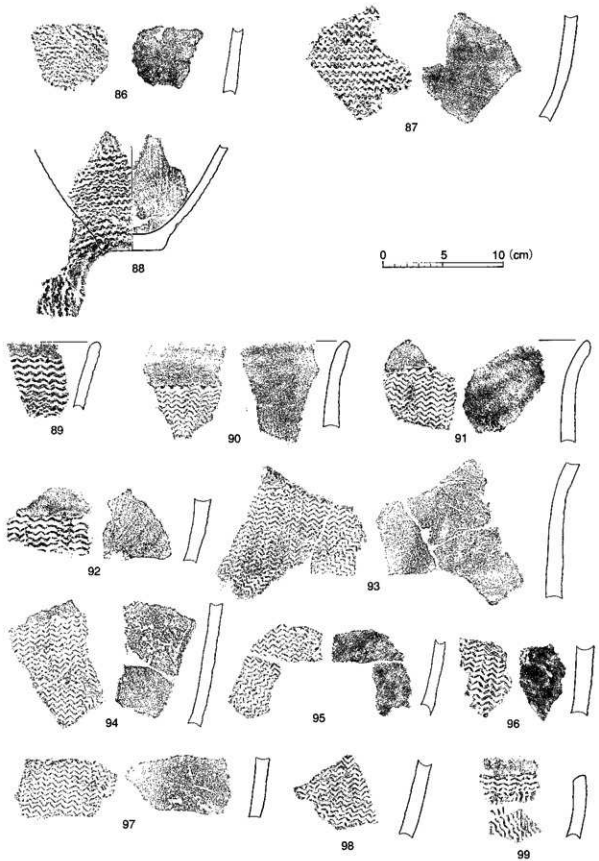
（89）は、口縁部に無文帯を持たず、横位に施文されたものである。これに対し、同一個体である（90～94）は、口縁直下に無文帯を置き、下位に施文を行うものである。器壁は厚く、無文帯部は大きく外反する。（95・98）は、複数回施文する過程で、施文方向に



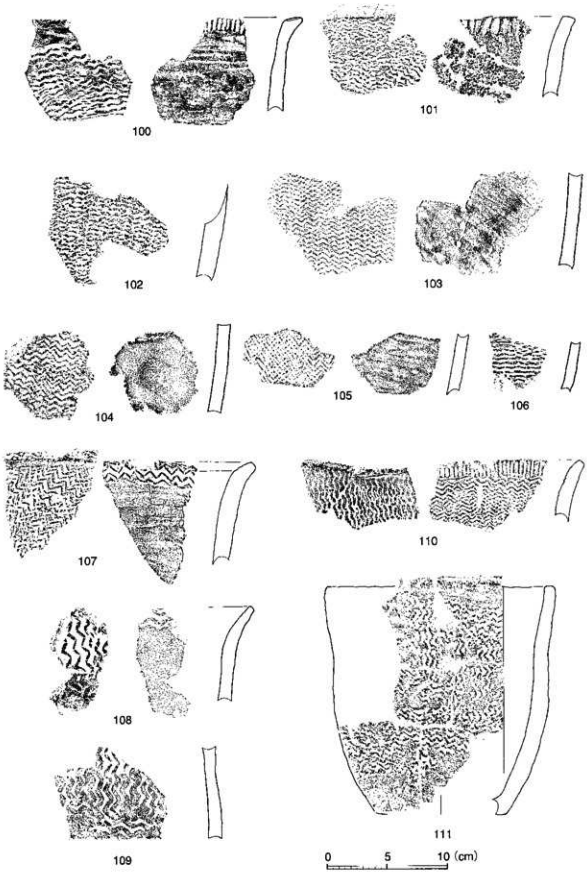
第24図　出土遺物実測図



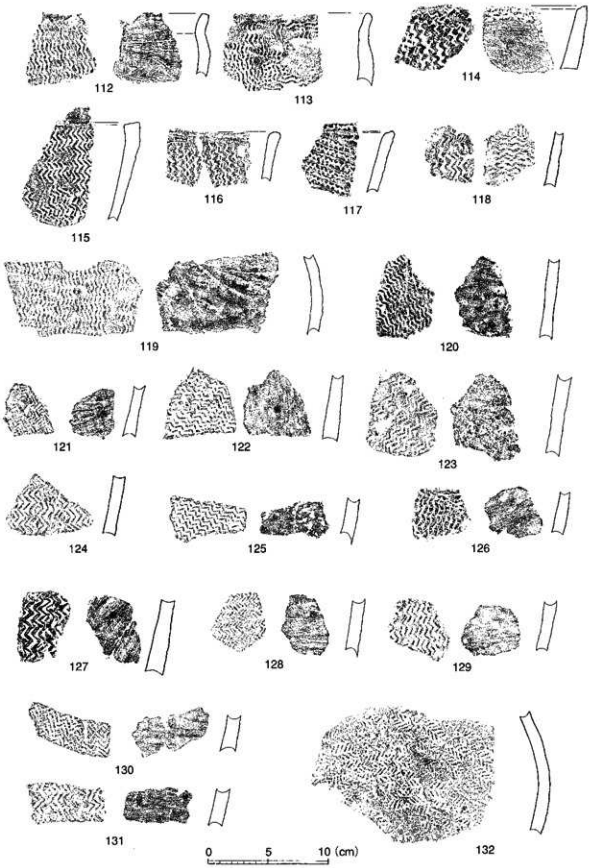
第25図　出土遺物実測図



第26図　出土遺物実測図



第27図　出土遺物実測図



第28図　出土遺物実測図

変化が見られる。(99) は、口縁部は横位、それ以下は斜位の山形押型文が施文される。断面は口縁がやや内湾気味であり、口唇部は、内面に向けやや傾斜する。口縁部無文帯は (100) にも認める事ができ、無文帯部は大きく外反する点も共通する。口唇部上面には浅い刻みが使用されるが、これは、本来なら内面に行われる原体条痕と思われる。(101) には無文帯が用意されず、胴部から変化なく口縁部に達する器形だったと考えられる。横位から斜位の施文が何度も行われている。(102～106) の胴部も、同様に施文されたようである。(107) は、器壁が著しく厚く、斜位に深い文様が刻まれた土器である。内面には稜があり、その上部に、外面と同様の文様が施文される。(108) は口縁部～胴部であり、外面は縦位に、内面は横位に施文される。(109) は胴部上半であるが、最大径付近で施文方向が変わる。なお、(107～109) は、口縁が外反し、頸部で窄まった後、胴部が膨らむ器形を呈すると思われる。(110) は、縦位の施文が行われたものである。内面には横位の山形押型文が施され、その後に原体条痕が行われる。外面とは施文方向のみでなく、原体も異なる。(111) は、分厚い器壁を持つ、寸胴な器形を呈しており、口縁部に僅かに施文帯を置き、外面には縦横の施文が行われる。(112・113・119) は同一個体である。口縁が外反し、頸部で括れ、胴部が丸く膨らむ器形を呈し、外面は胴部までは縦位に、それ以下は横位に施文が行われる。内面に文様は施文されない。器壁は部位によって変化がある。(114) は、内面に稜を持ち、そこに施文が行われる。(115) は、口縁が肥厚し、断面が方形を呈する。口唇部はやや内傾する。(132) は、胴部が大きく膨らむ器形であり、押型文を何度も施文して空白部を埋めている。それほど大型ではなく、壺形の器形を呈すると思われる。

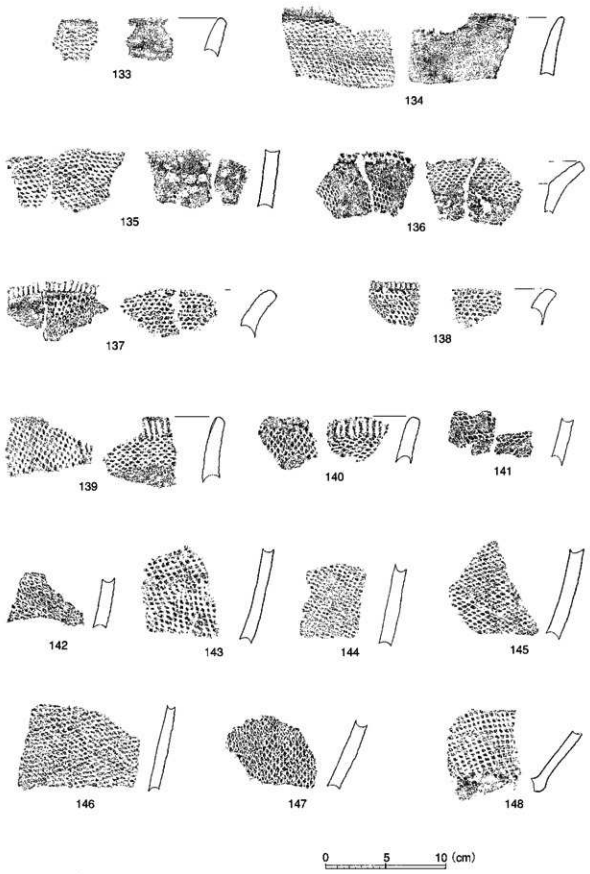
Ｖｂ類：楕円押型文土器 (133～161)

Ｖｂ類－１：楕円が細粒である土器 (133～148)

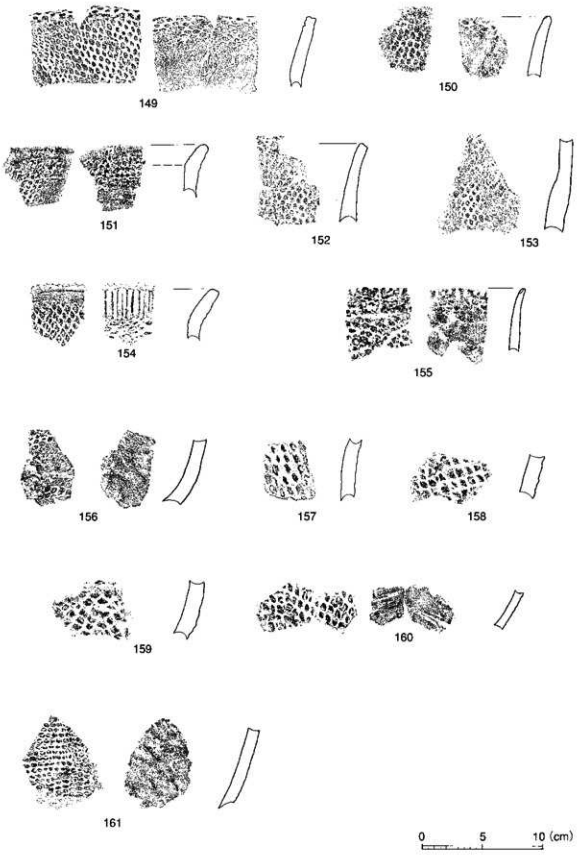
(133) は、横位に施文されたものである。(134) は、横位の施文の後に、縦位の施文を行ったものである。これらには、内面施文は行われない。(136) は、縦位の施文が行われているが、施文は全面には行われず、部分的に空白を持つ。内面には稜があり、その上部に外面と同じ施文が行われる。また、押型施文は大きく外反した口唇部にも行われる。(137・138) は、内外面に施文が行われるだけでなく、口唇部には刻目が認められる。これは、元は (139・140) の内面上部に行われる原体条痕の変化したものであろう。(141～148) も、細粒であるためこの分類に属するが、何度も繰り返し施文されたようである。なお、(148) は底部付近に当たるが、大きく窄まっており、平底を呈す。底部は胴部に比べ、かなり肥厚する。

Ｖｂ類－２：楕円が細粒と粗粒の中間である土器 (149～156)

(149) は、外面が縦位に近い斜位の角度に施文されたものであり、内面と口唇部にも同じ文様が施される。(150～152) は、口唇部は無文である。(154) の内面は、上部に原体条痕が深く刻まれる。一方、(155) は刻目程度にしか付けられておらず、下位も、微かに施文される程度である。(156) は底部付近と思われ、下位に行くほど肥厚するが、底部



第29図　出土遺物実測図



第30図　出土遺物実測図

の形態は不明である。

Ｖｂ類－３：楕円が粗粒である土器（157～161）

いずれも胴部片である。厚さや傾き等ばらばらである。（157）の原体を想定すると、三次元的に楕円の粒子が彫られるのに対し、（160）は図と地の境を示す溝が深く彫られたのみであり、楕円の粒子に手を加えた形跡は認められない。

Ｖｃ類：その他の押型文土器（162～176）

いずれにも該当しなかった押型文土器である。

（162～171）は、山形押型文の「山」の部分が列状に並ばず、故に六角形に似た文様が連続する。（162～166）は、比較的細粒である。繰り返し施文が行われているため、原体の観察は困難である。なお、（166）は全体的に作りが粗く、焼成も粗悪である。内面の頂部には工具による刺突が連続するが、これは原体条痕を意図したと考えられる。（167～171）は、比較的大粒のものである。このうち（167・168）は同一個体である。部分的に何度も施文を行うが、基本的には一度の施文で済ませたようである。内面上部には原体条痕が行われるが、下位に押型文による施文は行われない。

（172・173）は格子目である。（172）は薄手であり、内外面共に施文が行われる。上部には原体条痕も行われており、口縁部付近であったと考えられる。（173）は一転して厚手であり、何度も施文を行っている。

（174・175）は同一個体である。器面はやや摩滅しているが、半月状、若しくは三角形状の原体を回転させたと思われる。器壁は厚い。

（176）は、菱形が二重に彫られたものである。この文様は、外面だけでなく、内面と口唇部にも施文されている。

Ｖｄ類：押型文と他の文様との併用（177～183）

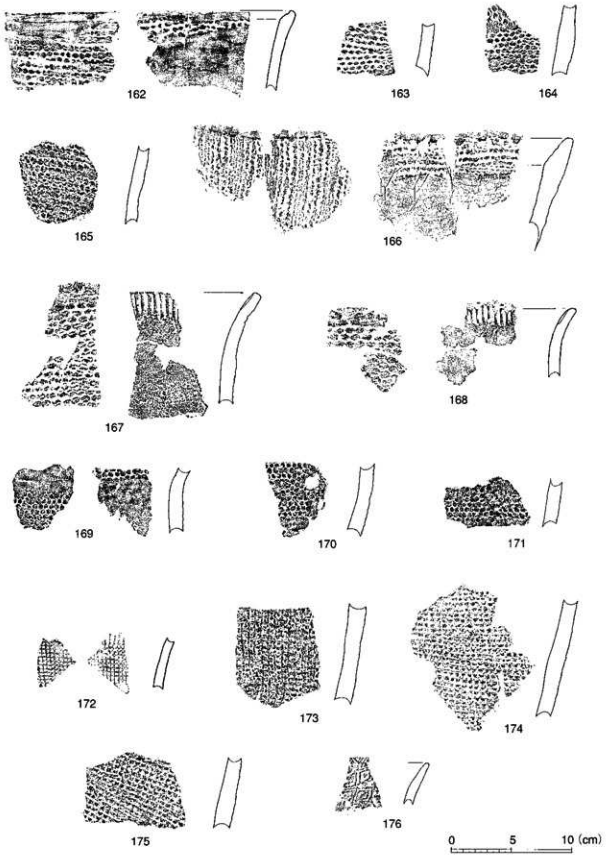
（177～180）は同一個体である。これは、口縁部付近に横位の山形押型文が、頸部以下に撚糸文が施文される。これは、本遺跡の前年度に調査されたズクノ山第２遺跡Ｄ地区のＳＰ－01で検出された土器と同一個体であり、中には接合するものもある。

（181）は山形押型文と縄文の併用である。文様が重なる部分はなく、文様帯が明確に分離している。（182）は山形押型文を横位に施文した後に、横位の二枚貝条痕文を深く施文した土器である。（183）は斜位の山形押型文の上に、沈線を行ったものである。

Ⅵ類：平棺式土器（184～193）

（184）は刻目を行う突帯を数条貼り付け、やや間隔の空いた頸部に沈線による幾何学的文様を施文したものである。（184～189）は刻目突帯の貼付けに先んじて縄文が施文される。

（190～193）は、刻目突帯の間に、縄文に代わり沈線が使用される。（192）は沈線と短沈線によって埋められる。（193）は、鋭利な工具による沈線が施文されたものである。（193）を除き、Ⅵ類は焼成が悪く、全体的に摩滅が激しい。



第31図　出土遺物実測図

Ⅶ類：塞ノ神式土器（194～202）

（194～199）は胴部が真っ直ぐに立ち上り、口縁部がラッパ状に開く器形を呈する。胴部には縦位に撚糸文土器が垂下し、その上から、数条の沈線が横位に巡る。（195～196）は口唇部に浅く細かい刻目が施される。（202）は、貝殻腹縁による刺突が横位に施文されたものであり、その間を、不規則な沈線が施文される。他の土器とは異なり、口縁部と胴部の境に変化は見られない。

Ⅷ類：縄文系の土器（203～208）

全面に縄文が施文された土器である。このうち、内面にまで施文が行われるのは（205）のみである。

Ⅸ類：撚糸文系の土器（209～218）

撚糸文のみを施文した土器である。（209）は口縁が肥厚しており、撚糸が主に横位に施文されたものである。（210）は、内面上部にも撚糸が施文される。（211）は、原体に撚糸が複雑に結ばれる。（212・213）は撚糸による施文を行った後、ナデにより凹凸が緩和されている。（214・215）は、撚糸を連続的に巻いた原体を使用したと考えられるが、（216～218）は網目状に結んだ結果である。

Ⅹ類：条痕文系の土器（219）

1点のみ出土した。二枚貝を使用し、口縁直下に横位の沈線を1本巡らし、その下位に縦位の沈線を連続的に施文したものである。口縁の断面は丸く、上部で僅かに内傾する。

ⅩⅠ類：無文土器（220・221）

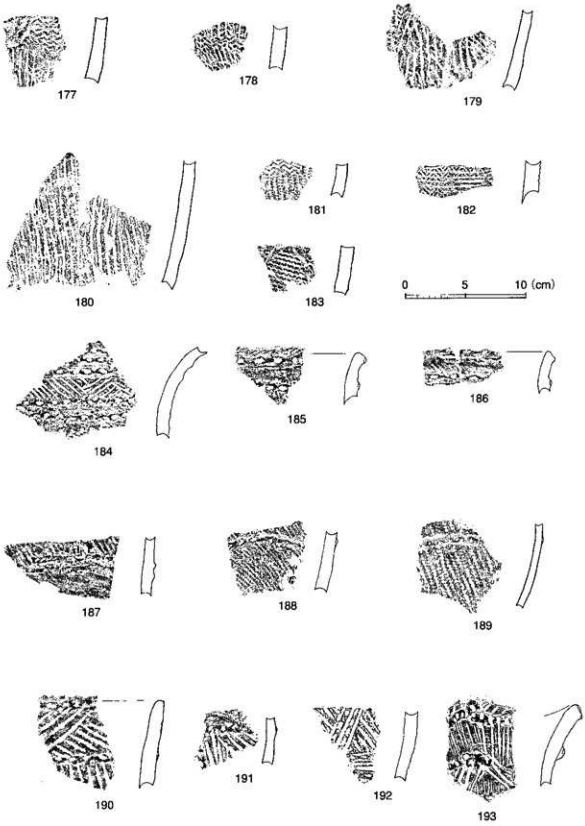
（220）は器壁が厚く、口唇部は稜が弱いながらも内傾する。内外面共、調整はナデのみである。（221）は、口縁部に明確な稜を形成する。

ⅩⅡ類：その他の土器（222～228）

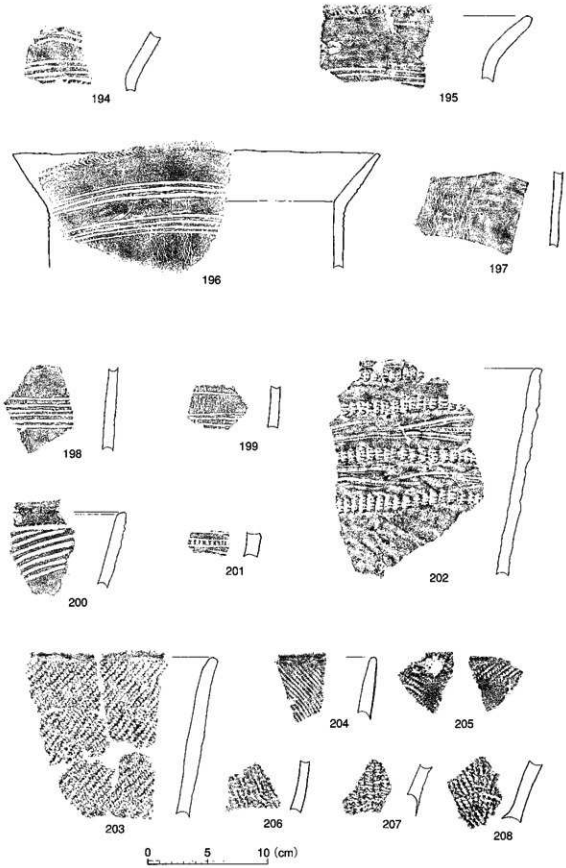
（222）は、外面に短い隆帯が粗雑に貼り付けられる。隆帯上には、雑な刺突が行われた痕跡が認められる。（223）は、丁寧に磨かれた器面に数本単位の鋭利な沈線が浅く付けられた土器である。（224）の外面に施文される叉状工具による曲線文はⅢ類のそれと同一であるが、これは曲線の空白地に、貝殻腹縁による刺突が行われる。（225）は二枚貝による条痕が行われたものである。Ⅹ類と分類上は同じであるが、こちらは直線のみならず曲線も多用しており、また直線も取り混ぜるなどの施文も駆使しているため、その他とした。（226）は叉状の工具が連続的に垂下したものである。（227）は浅い刺突が行われる。

Ⅱ・縄文時代早期の石器

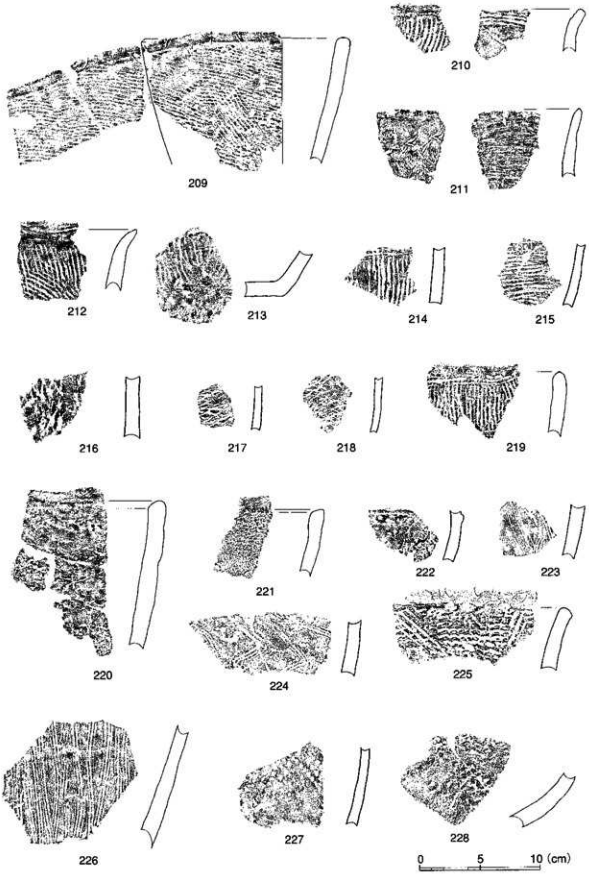
石器としては、石鏃が17点、尖頭状石器が8点出土しているに過ぎない。また、磨石についても、僅か10点が出土しているのみである。ほかは、石斧2点、粗悪なチャート片、黒耀石のチップ類である。チャート片は、本遺跡の立地する丘陵地南部の礫層中に含まれるものであり、全面に渡って節理面が多く、その粗悪さゆえ、石器製作には適さない。ただし、打撃を加え剥離を行っていることから、石器として使用する目的はあったと考えられる。



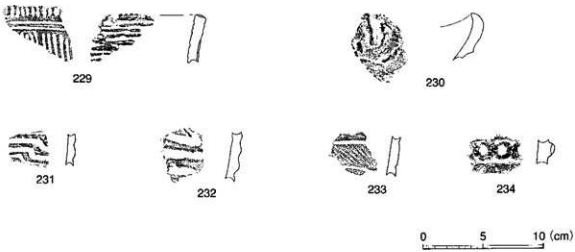
第32図　出土遺物実測図



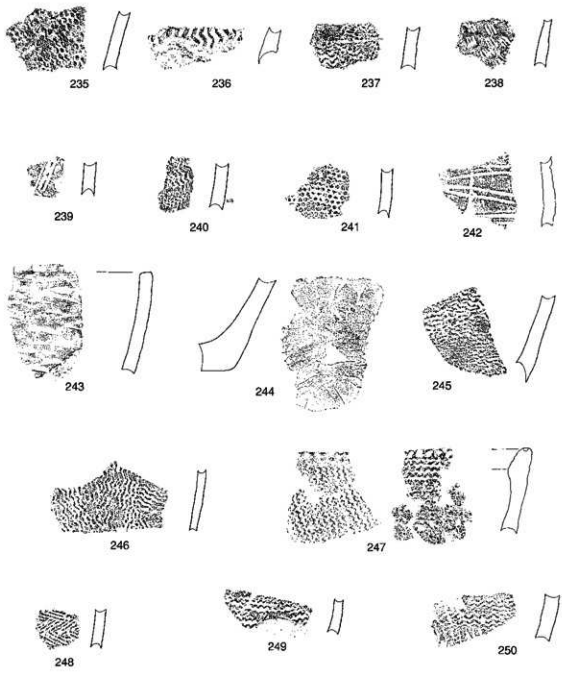
第33図　出土遺物実測図



第34図　出土遺物実測図



第35図　出土遺物実測図



235・236…SI-06内　240・241…SI-19内　246 …SC-05内
237 …SI-15内　242 …SI-34内　247～…SC-06内
238・239…SI-16内　243～245…SI-02内　250 …SC-08内

第36図　遺構内出土遺物実測図

胎土（長石:A　角閃石:B　石英:C　砂粒:D　雲母片:E）（多量:多　中量:中　少量:少　微量:微）

No.	出土	部位	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
12	C	口縁部	ケズリ→貝殻腹縁刺突→棒形突起貼付	横位ケズリ→ナデ	橙5YR6/6	A:少B:微C:少	口唇部に浅い刻み
13	C	胴部	ケズリ→貝殻腹縁刺突	ケズリ→ナデ	橙7.5YR6/8	A:少B:微C:少	
14	EIV層	胴部	ケズリ→棒形突起貼付	ケズリ→横位ナデ	明赤褐5YR5/8	A:中B:少C:少	
15	BIV層	胴部	ナデ→半竹管状工具刺突	横位ケズリ→ナデ	明赤褐5YR5/6	A:微B:微C:多D:少E:少	
16	DIV層	口縁部	連点→横位条痕	横位調整（摩滅のため不明）	黒褐10YR3/2	A:中B:少C:中D:微	口唇部に刻み
17	DIV層	口縁部	斜位二枚貝条痕→貝殻腹縁刺突	ケズリ→丁寧な横位ナデ	橙5YR6/8	A:少B:微C:中D:少	口唇部ケズリ
18	C	口縁部	斜位二枚貝条痕→斜位二枚貝短沈線（口縁部）	横位ケズリ	にぶい橙5YR7/4	A:多B:中C:少D:微	
19	CIV層	口縁部	工具による斜位条痕	横位ケズリ→丁寧なナデ	にぶい黄橙10YR7/4	A:多B:微C:多D:少	口唇部ケズリ
20	BIV層	口縁部	横位条痕	斜位ケズリ→ナデ	鈍7.5YR4/3	A:少C:多E:少	口唇部ケズリ
21	III層	胴部	又状工具による縦位条痕→ナデ	横位ケズリ→縦位ケズリ	にぶい黄橙10YR7/4	A:少B:微C:多E:中	
22	C	口縁部	又状工具による羽状の短沈線→ケズリ・ナデ（口縁部）	縦位ナデ→横位ケズリ	暗赤褐5YR3/2	A:多B:微C:多E:多	口唇部ケズリ・Cやに多い・粗大
23	BIV層	口縁部	又状工具による羽状の短沈線	横位ケズリ	鈍10YR4/4	A:多B:中C:多D:微	
24	CIII層	口縁部	沈線→又状工具による羽状の短沈線	横位ケズリ	鈍7.5YR4/4	A:少B:微C:多D:少	口唇部ケズリ
25	C	口縁部	又状工具による羽状の短沈線	ナデ	黒褐10YR2/2	A:中B:微C:多D:少	焼成前穿孔有り・煮こぼれ付着
26	C	口縁部	又状工具による羽状の短沈線	摩滅により不明	浅黄2.5Y8/4	A:少B:微C:中	補修孔有り（未完通）
27	C	口縁部	又状工具による羽状の短沈線	横位ナデ	浅黄2.5Y7/4	A:微B:微C:少	口唇部ケズリ
28	C	口縁部	又状工具による羽状の短沈線	横位ケズリ	にぶい橙7.5yr6/4	A:中B:微C:多D:中	口唇部ケズリ
29	C	胴部	又状工具による羽状の短沈線	ナデ	にぶい赤褐5YR4/4	A:少C:多	煮こぼれ付着
30	CIV層	胴部	又状工具による羽状の短沈線	横位ケズリ・ナデ	橙5YR6/6	A:少B:微C:少	
31	B・C	胴部	又状工具による羽状の短沈線	斜位ケズリ	黄褐10YR5/6	A:多B:中C:多D:微	
32	C	胴部	又状工具による羽状の短沈線	粗雑な縦位ケズリ	橙7.5YR7/6	A:多B:少C:多	
33	CIII層	口縁部	又状工具による鋭利な羽状の短沈線	横位ケズリ→丁寧なナデ	にぶい橙7.5yr6/6	A:多B:中C:少	口唇部ケズリ
34	CIII層	口縁部	又状工具による羽状の短沈線	横位ケズリ	橙7.5YR6/6	A:少B:中C:中D:微	口唇部ケズリ
35	BIII層	口縁部	又状工具による羽状の短沈線	横位ケズリ	明赤褐5YR5/8	A:少B:微C:多E:微	Cやに多い
36	C	口縁部	又状工具による羽状の短沈線	粗雑な横位ケズリ	橙5YR6/6	A:多B:多C:多	口唇部ケズリ
37	C	口縁部	又状工具による縦位波状沈線	粗雑な横位のケズリ→ナデ	黒10YR2/1	A:多B:中C:多D:微	外面に部分的なナデけし有り
38	C	口縁部	条痕→ナデ→又状工具による縦位波状沈線	ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	A:多B:微C:中	
39	CIII層	口縁部	又状工具による縦位波状沈線	横位ケズリ→ナデ（口縁部）	橙7.5YR7/6	A:多B:微C:多E:少	Aやに多い
40	CIII層	胴部	又状工具による縦位波状沈線→短沈線	摩滅により不明	にぶい黄橙10YR7/4	A:多B:中C:多	
41	C	口縁部	又状工具による横位沈線→縦位波状沈線	横位ケズリ→横位ナデ	黄橙10YR4/6	A:微B:微C:中D:微	
42	C-III層	口縁部	又状工具による粗雑な縦位波状沈線	粗雑なケズリ→ナデ（口縁部）	明褐7.5YR6/6	A:多B:微C:中	
43	CIV層	胴部	又状工具による縦位波状沈線	ナデ	明褐7.5YR7/6	A:多B:少C:多D:微	
44	CIII層	口縁部	又状工具による縦位波状沈線	横位ケズリ→斜位ケズリ	にぶい橙7.5YR7/4	A:多B:少C:中D:微	口唇部ケズリ
45	C	胴部	又状工具による縦位波状沈線	横位ケズリ→ナデ	赤褐5YR4/6	A:多B:中C:多	
46	CIII層	胴部	又状工具による縦位波状沈線	丁寧なナデ	暗灰黄2.5Y4/2	A:微C:多E:少	Cやに多い

表1　出土土器観察表

胎土（長石:A　角閃石:B　石英:C　砂粒:D　雲母片:E）（多量:多　中量:中　少量:少　微量:微）

No.	出土	部位	外面調整	内面調整	色　調	胎　土	備　考
47	C Ⅲ層	胴部	叉状工具による縦位波状沈線	丁寧なナデ	暗灰黄2.5Y5/2	A:微C:多E:少	C特に多い・粗大
48	C	口縁部	叉状工具による横位短沈線→縦位沈線	横位ケズリ→ナデ	緑オリーブ黒　2.5Y3/3	A:微B:微C:多D:微E:少	口唇部ケズリ→ナデ
49	C	口縁部	叉状工具による短沈線	横位ケズリ→ナデ	褐7.5YR4/3	A:少B:微C:多D:微E:少	48と同一固体
50	C	胴部	叉状工具による短沈線	斜位ケズリ	明赤褐5YR5/6	A:微B:微C:多D:微E:少	48と同一固体
51	C	胴部	叉状工具による縦位波状沈線→斜位短沈線	斜位ケズリ	明赤褐5YR5/6	C:多E:微	48と同一固体
52	B Ⅳ層	口縁部	横位貝殻腹縁刺突	横位ケズリ	明赤褐5YR5/8	A:多B:微C:多	
53	B Ⅳ層	胴部	工具による斜位の刺突	斜位ケズリ	にぶい褐7.5YR5/4	C:多E:中	C特に多い
54	C	胴部	工具による羽状の刺突	ケズリ	明赤褐5YR5/8	A:少B:微C:中E:微	
55	C	胴部	工具による綾杉状の刺突	粗雑な縦位ケズリ	にぶい赤褐5YR5/4	A:微B:微C:多D:少E:微	
56	C Ⅲ層	口縁部	工具による羽状の刺突→横位沈線	丁寧なナデ	灰黄褐10YR4/2	A:多C:少E:微	口唇部ケズリ・A特に多い
57	C Ⅲ層	胴部	工具による羽状の刺突・叉状工具波状沈線	丁寧なナデ	黒褐2.5Y3/2	A:多B:微C:微	A特に多い・56と同一固体
58	B Ⅳ層	口縁部	工具による横位沈線→工具による羽状の刺突	丁寧なナデ	褐7.5YR4/6	A:多B:微C:微	A特に多い
59	C	胴部	工具による横位沈線・工具による羽状の刺突	丁寧なナデ	にぶい赤褐5YR4/4	A:多B:微C:微	A特に多い・59と同一固体
60	C Ⅲ層	口縁部	横位山形押型文	横位ナデ→横位山形押型文	明褐7.5YR5/6	A:微B:少C:多	内面に炭化物付着
61	C Ⅲ層	口縁部	横位山形押型文	横位山形押型文→原体条痕	黄橙10YR8/6	A:少B:微C:微	
62	C	口縁部	横位山形押型文	斜位ナデ	にぶい橙5YR7/4	A:中B:多C:微	
63	C Ⅲ層	口縁部	横位山形押型文	横位山形押型文→原体条痕	浅黄2.5Y7/3	A:中B:中C:中	
64	B Ⅳ層	胴部	斜位山形押型文	ケズリ→丁寧なナデ→横位山形押型文→原体条痕	にぶい赤褐5YR4/3	A:少B:微C:多D:微E:中	
65	B	口縁部	斜位山形押型文	斜位ナデ→横位山形押型文→原体条痕	黄灰2.5Y5/1	A:中B:少C:中	
66	C	口縁部	斜位山形押型文	横位ナデ→横位山形押型文→原体条痕	浅黄2.5Y7/3	A:中B:微C:中D:微	65と同一固体
67	C	口縁部	横位山形押型文	横位山形押型文→原体条痕	にぶい黄橙10YR6/3	A:微B:微C:中	
68	C	胴部	斜位山形押型文	丁寧な横位ナデ・山形押型文	にぶい黄橙10YR7/3	A:多B:少C:少	A特に多い
69	C Ⅲ層	口縁部付近	斜位山形押型文	横位ナデ→横位山形押型文	黄2.5YR8/6	A:中B:少C:少	
70	C	胴部	山形押型文	丁寧なナデ	にぶい黄橙10YR7/4	A:多B:少C:少	A特に多い
71	B Ⅳ層	口縁部	縦位山形押型文	不定方向のケズリ→横位山形押型文	明黄褐10YR7/6	A:多B:少C:中	A特に多い
72	B Ⅳ層	口縁部	山形押型文	横位山形押型文→不定方向の粗雑なケズリ	橙2.5YR6/6	A:少B:微C:多E:微	補修孔有り（未完通）・口唇部刻み
73	C	口縁部	縦位山形押型文	原体条痕→横位山形押型文	にぶい橙7.5YR7/4	A:中B:微C:少	
74	C	口縁部付近	縦位山形押型文	ナデ→横位山形押型文	にぶい橙7.5YR7/4	A:多B:微C:中	
75	C	胴部	横位山形押型文	斜位ナデ	にぶい赤褐5YR5/4	A:微C:少D:微	
76	C	胴部	斜位山型押型文	剥落により不明	明黄褐10YR6/6	A:多B:少C:中	
77	C	胴部	縦位山形押型文	丁寧な横位ナデ	にぶい黄褐10YR5/4	A:微B:微C:多D:微E:少	
78	B Ⅳ層	胴部	山形押型文	粗雑な斜位ケズリ	にぶい黄橙10YR6/4	A:微C:多E:微	C特に多い
79	C	胴部	斜位山形押型文→横位山形押型文	横位ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	A:多B:多C:多D:微	
80	C	胴部	横位山形押型文→縦位山形押型文	不定方向のケズリ	にぶい赤褐5YR5/4	A:少B:微C:少	
81	C	底部付近	山形押型文→横位ケズリ	ケズリ	明赤褐5YR5/8	A:少B:微C:中	

表２　出土土器観察表

胎土（長石:A　角閃石:B　石英:C　砂粒:D　雲母片:E）（多量:多　中量:中　少量:少　微量:微）

No.	出土	部位	外面調整	内面調整	色　調	胎　土	備　考
82	C Ⅲ層	胴部	山形押型文	不定方向のケズリ	にぶい黄褐10YR5/4	A:微C:多E:多	
83	B Ⅳ層	胴部	山形押型文	縦位ナデ	にぶい黄2.5Y6/3	A:中B:微C:中	
84	C	口縁部付近	縦位山形押型文	横位ナデ→横位山形押型文	にぶい黄橙10YR7/4	A:多B:中C:中D:微	
85	B Ⅳ層	口縁部	山形押型文	横位山形押型文→工具による粗雑なケズリ	黒褐2.5Y3/2	C:多D:微E:中	口唇部深い刺突
86	C	胴部	山形押型文	丁寧な横位ナデ	にぶい橙5YR7/4	A:微B:少C:中D:微	
87	C	胴部	横位山形押型文	丁寧な横位ナデ	黄褐2.5Y5/3	A:多B:中C:中D:微	
88	C Ⅳ層	底部	山形押型文	不定方向のケズリ	明赤褐5YR5/8	A:微B:微C:少	
89	B Ⅳ層	口縁部	横位山形押型文	横位ケズリ→ナデ	橙7.5YR6/6	A:微B:微C:中D:微	
90	C Ⅲ層	口縁部	横位ナデ→横位山形押型文	不定方向のナデ	灰黄2.5Y8/4	A:中B:微C:中	
91	C	口縁部	横位ケズリ→横位山形押型文	不定方向のナデ→斜位ケズリ	黄橙10YR8/6	A:多B:少C:少	90と同一個体
92	C	口縁部付近	横位ナデ→横位山形押型文	不定方向のナデ→斜位ケズリ	にぶい黄褐10YR5/4	C:多D:中E:微	
93	C Ⅲ層	胴部	横位ナデ→山形押型文	不定方向のナデ	にぶい黄橙10YR7/4	A:多B:中C:中D:微	90と同一個体
94	C	胴部	横位ナデ→横位山形押型文	不定方向の丁寧なナデ	黄橙10YR8/6	A:多B:中C:中D:微	90と同一個体
95	C	胴部	山形押型文	不定方向の丁寧なナデ	浅黄橙7.5YR8/6	A:中B:中C:中	
96	C	胴部	横位山形押型文	不定方向のケズリ	暗オリーブ褐2.5Y3/3	A:中B:少C:少	
97	C	胴部	横位山形押型文	丁寧な横位ナデ	黄橙10YR8/6	A:少B:少C:少D:微	
98	B Ⅳ層	胴部	横位山形押型文	ナデ	橙7.5YR6/8	A:中B:中C:中	97と同一個体
99	B Ⅲ層	口縁部	山形押型文	ナデ	暗褐10YR3/4	A:微C:多D:微E:微	
100	C	口縁部	横位山形押型文	原体条痕→横位ケズリ	橙7.5YR4/4	A:微B:微C:多E:少	
101	B Ⅳ層	口縁部	横位山形押型文	原体条痕・ナデ？(剥落により不明)	橙7.5YR6/8	A:多B:少C:中D:中	
102	B Ⅳ層	胴部	横位山形押型文	横位ナデ	灰黄褐10YR4/2	A:多B:微C:中D:中	
103	C Ⅲ層	胴部	横位山形押型文	斜位ケズリ	にぶい黄橙10YR6/4	A:少B:少C:多E:中	
104	C	胴部	横位山形押型文	縦位ナデ	明黄褐10YR7/6	A:中B:中C:少D:少	
105	C Ⅲ層	胴部	横位山形押型文	横位ケズリ	にぶい黄2.5Y6/3	A:少B:少C:多D:微	
106	C	胴部	横位山形押型文	横位ケズリ	明赤褐5YR5/8	A:少B:微C:少D:微	
107	B Ⅳ層	口縁部	斜位山形押型文	横位山形押型文→横位ケズリ	にぶい橙7.5YR6/4	A:中B:微C:少D:少	口唇部山型押型文
108	B Ⅲ層	口縁部	縦位山形押型文	ナデ→横位山形押型文	浅黄2.5Y7/4	A:多B:少C:少	
109	B Ⅳ層	胴部	縦位山形押型文・横位山形押型文	横位ナデ	明黄褐10YR7/6	A:多B:少C:少D:微	
110	B Ⅳ層	口縁部	縦位山形押型文→横位ナデ(口縁部)	原体条痕→横位山形押型文	にぶい黄橙10YR6/4	A:微C:微D:微	
111	B Ⅳ層	口縁部～底部	横位ケズリ(口縁部)→横位山形押型文	横位山形押型文→不定方向のケズリ	浅黄橙7.5YR8/6	A:少B:微C:少	
112	C	口縁部	縦位山形押型文	横位ナデ→粗雑な斜位ケズリ(口縁部下)	にぶい黄2.5Y6/4	A:微C:多D:微E:微	
113	B Ⅳ層	口縁部	山形押型文	横位ナデ→不定方向の粗雑なケズリ(口縁部下)	にぶい黄橙10YR6/3	A:微C:多D:微E:微	112と同一個体
114	C	口縁部	山形押型文	不定方向のケズリ	橙5YR6/6	A:少B:微C:中D:微	口唇部横位山形押型文
115	B Ⅳ層	口縁部	縦位山形押型文	横位ケズリ	褐7.5YR4/3	A:微B:微C:多D:微E:多	
116	B Ⅳ層	口縁部	縦位山形押型文	不定方向のケズリ	にぶい橙7.5YR6/4	B:微C:多D:微E:微	焼成前?穿孔有り・Cが特に多い

表３　出土土器観察表

胎土（長石:A　角閃石:B　石英:C　砂粒:D　雲母片:E）（多量:多　中量:中　少量:少　微量:微）

No.	出土	部位	外面調整	内面調整	色　調	胎　土	備　考
117	C	口縁部	斜位山形押型文	横位ナデ	にぶい黄褐10YR5/3	A:微C:中D:微E:少	口唇部横位山形押型文
118	C	口縁部付近	縦位山形押型文	横位山形押型文→原体条痕	褐7.5YR4/6	A:微B:微C:少D:微E:微	胎土に繊維混入
119	C	胴部	縦位山形押型文	不定方向のケズリ	暗灰黄2.5Y4/2	A:微C:多D:微E:少	
120	C	胴部	斜位山形押型文	横位ナデ？（摩滅により不明）	橙7.5YR6/6	A:少B:中C:少D:微	
121	C	胴部	山形押型文	横位ケズリ	にぶい褐7.5YR5/4	A:微B:微C:多E:少	
122	C	胴部	斜位山形押型文	丁寧な横位ナデ→縦位ケズリ	橙7.5YR7/6	A:多B:中C:中	
123	C III層	胴部	斜位山形押型文	斜位ケズリ	にぶい黄褐10YR5/4	B:微C:多D:少E:微	C特に多い
124	B IV層	胴部	縦位山形押型文	斜位ケズリ→ナデ	浅黄5Y7/3	A:中B:微C:中	
125	C	胴部	斜位山形押型文	丁寧な縦位ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	A:微B:中C:少D:微	
126	B	胴部	山形押型文	横位ケズリ	明赤褐5YR5/8	A:少B:微C:少D:少	胎土に繊維混入
127	C III層	胴部	縦位山形押型文	斜位ケズリ	にぶい黄橙10YR6/4	A:微B:微C:少D:少	
128	C	胴部	縦位山形押型文	横位ケズリ	にぶい褐7.5YR5/4	A:微B:微C:多D:少E:中	
129	C	胴部	縦位山形押型文	不定方向のケズリ→ナデ	にぶい黄褐10YR4/3	C:多D少E:多	C特に多い
130	C	胴部	山形押型文	斜位ケズリ→丁寧なナデ	にぶい黄橙10YR7/3	A:微B:少C:多D:微	
131	C	胴部	縦位山形押型文	丁寧な横位ナデ	灰5Y4/1	A:中B:少C:中D:微	
132	B	胴部	山形押型文	ナデ	明黄褐10YR7/6	A:中B:微C:中	
133	C III層	口縁部	横位楕円押型文	横位ナデ	橙7.5YR7/6	A:多B:中C:多	
134	C	口縁部	楕円押型文	横位ケズリ→横位ナデ	にぶい黄褐10YR5/3	A:中B:中C:多D:中	
135	C	胴部	楕円押型文	剥落により不明	にぶい黄橙10YR7/4	A:多B:多C:中	
136	C III層	口縁部	ナデ→縦位楕円押型文	横位楕円押型文・粗雑なケズリ（口縁部下）	にぶい赤褐5YR5/4	A:中B:微C:多D:中	口唇部横位楕円押型文
137	B IV層	口縁部	横位ナデ→斜位楕円押型文	横位楕円押型文	灰黄褐10YR4/2	B:微C:多E:多	口唇部刻み・C特に多い
138	B IV層	口縁部	横位ナデ→斜位楕円押型文	横位楕円押型文	灰黄褐10YR4/2	C:多E:多	口唇部刻み・C特に多い
139	B IV層	口縁部	縦位楕円押型文	ナデ→横位楕円押型文→原体条痕	鉄黄2.5Y8/4	A:多B:多C:多	
140	C	口縁部	縦位楕円押型文	横位楕円押型文→原体条痕	にぶい黄橙10YR7/3	A:中B:中C:少D:微	
141	C III層	胴部	楕円押型文	不定方向のケズリ	にぶい褐7.5YR5/3	A:少B:微C:多E:中	
142	C	胴部	斜位楕円押型文	丁寧な縦位ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	A:微B:微C:多E:微	
143	B IV層	胴部	楕円押型文	斜位ナデ	橙5YR6/8	A:多B:少C:多D:微	
144	D IV層	胴部	斜位楕円押型文	斜位ケズリ→ナデ	明褐7.5YR5/6	A:多B:少C:多D:微	
145	B IV層	胴部	横位楕円押型文	剥落により不明	にぶい黄褐10YR5/3	A:多B:中C:中D:少	
146	C	胴部	斜位楕円押型文	丁寧な横位ナデ	浅黄橙7.5YR8/4	A:多B:中C:多E:少	
147	C	胴部	縦位楕円押型文	横位ケズリ→ナデ	にぶい黄橙10YR7/3	A:多B:中C:多D:微	
148	C	底部	斜位楕円押型文	丁寧なナデ	明黄褐10YR6/6	A:多B:微C:中	
149	B IV層	口縁部	斜位楕円押型文	横位楕円押型文→ナデ	浅黄2.5Y7/4	A:少B:少C:中D:微	口唇部横位楕円押型文
150	B IV層	口縁部	縦位楕円押型文	横位楕円押型文・ナデ	明褐7.5YR5/8	A:中B:微C:中D:中	
151	B IV層	口縁部	横位ナデ→斜位楕円押型文	横位楕円押型文・横位ケズリ	にぶい黄橙10YR7/4	A:中B:少C:多	

表4　出土土器観察表

胎土（長石:A　角閃石:B　石英:C　砂粒:D　雲母片:E）（多量:多　中量:中　少量:少　微量:微）

No.	出土	部位	外面調整	内面調整	色　調	胎　土	備　考
152	BIV層	口縁部	縦位楕円押型文	横位楕円押型文→ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	A:中B:微C:中D:中	
153	BIV層	胴部	縦位楕円押型文	横位ナデ	明黄褐10YR7/6	A:中B:微C:多D:微E:微	C粗大
154	BIV層	口縁部	縦位楕円押型文	横位楕円押型文→原体条痕	黒褐5YR3/1	A:中B:微C:少D:微	
155	CIII層	口縁部	斜位楕円押型文	横位楕円押型文	橙2.5YR6/8	A:多B:中C:多	口唇部刺突
156	CIII層	底部付近	楕円押型文	斜位ケズリ	明赤褐5YR5/8	A:中B:中C:多D:微	
157	BIV層	胴部	斜位楕円押型文	丁寧な横位ナデ	にぶい赤褐5YR4/4	A:中B:微C:多D:中	
158	C	胴部	斜位楕円押型文	摩滅により不明	明黄褐10YR7/6	A:中C:多D:少	
159	C	胴部	斜位楕円押型文	横位ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	A:中C:多D:少	158と同一個体
160	C	底部付近	楕円押型文	粗雑なケズリ→ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	A:微B:微C:多D:中E:少	
161	C	胴部	横位楕円押型文	粗雑な斜位ケズリ	褐10YR4/6	A:少C:多E:少	内面炭化物付着
162	C	口縁部	横位押型文→横位ケズリ	横位押型文→横位ケズリ	黒7.5YR2/1	A:中B:少C:多D:微	
163	CIII層	胴部	横位押型文	不定方向のケズリ	橙7.5YR6/6	A:多B:少C:多D:少	
164	CIII層	口縁部付近	縦位押型文・横位押型文	横位ケズリ	にぶい橙7.5YR7/4	A:多B:中C:多	
165	C	胴部	横位押型文	横位ケズリ	にぶい黄橙10YR5/4	A:多B:中C:多	
166	BIV層	口縁部	縦位押型文	横位ケズリ→横位押型文→刺突	にぶい黄橙10YR5/3	B:微C:多	C特に多い・粗大
167	BIV層	口縁部	横位押型文→横位ナデ（口縁部）	不定方向のナデ→原体条痕	にぶい黄橙10YR7/3	B:少C:多D:少E:中	C特に多い
168	BIV層	口縁部付近	横位押型文	ナデ→原体条痕	赤褐5YR4/6	B:少C:多D:少E:中	167と同一個体
169	C	頸部	横位押型文→横位ナデ	横位ナデ→横位押型文	にぶい褐5YR6/4	A:中B:微C:多D:微E:多	
170	C	胴部	横位押型文→横位ナデ	不定方向のナデ	にぶい褐7.5YR5/3	A:中B:微C:多D:微E:多	169と同一個体
171	C	胴部	横位押型文	斜位ケズリ	にぶい褐7.5YR5/3	B:微C:多E:多	
172	C	口縁部付近	格子目押型文	格子目押型文→原体条痕	浅黄橙10YR8/4	A:少B:少C:中	
173	C	胴部	格子目押型文	横位ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	A:微B:少C:多D:少E:中	C特に多い・粗大
174	C	胴部	斜位押型文	横位ナデ→縦位ケズリ	にぶい黄橙10YR6/4	B:微C:多	C特に多い・粗大
175	CIV層	胴部	斜位押型文	縦位ケズリ	浅黄橙10YR8/4	B:微C:多	174と同一個体
176	CIII層	口縁部	菱形押型文	横位ナデ→ひし形押型文	にぶい黄橙10YR7/3	A:多B:微C:中D:中	
177	CIII層	胴部	撚糸文→横位山形押型文	横位ナデ	浅黄2.5Y8/4	A:中B:中C:多D:微	
178	C	胴部	撚糸文→横位山形押型文	横位ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	A:多B:微C:中D:微	177と同一個体
179	BIV層	胴部	横位山形押型文→縦位撚糸文	不定方向のナデ	黄橙7.5YR8/8	A:多B:多C:多	177と同一個体
180	BIV層	胴部	縦位撚糸文	不定方向のナデ	黄橙10YR7/8	A:多B:多C:中D:少	177と同一個体
181	C	胴部	縄文→横位山形押型文	丁寧なナデ	橙7.5YR7/6	A:中B:中C:中	
182	CIII層	胴部	山形押型文→二枚貝条痕	不定方向のケズリ	暗灰黄2.5Y4/2	A:多B:中C:多	
183	CIII層	胴部	山形押型文→沈線	丁寧な横位ナデ	明赤褐5YR4/8	A:多B:多C:中D:少	
184	DIV層	口縁部付近	縄文→刻み目突帯貼付→沈線	横位ケズリ→丁寧な横位ナデ	にぶい黄橙10YR5/4	A:微B:少C:多D:少E:中	
185	DIII層	口縁部	縄文→刻み目突帯貼付	横位ケズリ→ナデ	暗褐10YR3/4	A:多B:微C:多D:微	口唇部縄文
186	DIV層	口縁部	縄文→刻み目突帯貼付	横位調整（摩滅により不明）	にぶい黄橙10YR7/3	A:多B:中C:少D:中	

表5　出土土器観察表

胎土（長石:A　角閃石:B　石英:C　砂粒:D　雲母片:E）（多量:多　中量:中　少量:少　微量:微）

No.	出土	部位	外面調整	内面調整	色　調	胎　土	備　考
187	CⅢ層	胴部	縄文→刻み目突帯貼付→横位ナデ	剥落により不明	橙7.5YR6/6	A:多B:中C:多D:多	
188	DⅣ層	胴部	縄文→刻み目突帯貼付	横位ナデ	橙7.5YR6/6	A:中B:多C:多D:少	
189	C	胴部	縄文→刻み目突帯貼付	斜位ケズリ→丁寧な斜位ナデ	褐10YR4/6	A:中C:多D:多E:中	
190	CⅢ層	口縁部	刻み目突帯→沈線	剥落により不明	浅黄2.5Y7/3	A:多B:多C:多D:中	
191	C	胴部	刻み目突帯→沈線	斜位ナデ	にぶい黄橙10YR5/4	A:多B:多C:多D:微	
192	DⅢ層	胴部	沈線→短沈線	斜位ケズリ→ナデ	にぶい黄橙10YR4/3	B:多C:多D:中E:多	C特に多い
193	DⅢ層	口縁部	刻み目突帯貼付→鋸い沈線	横位ナデ	褐10YR4/4	A:多B:中C:多D:少	口唇部刻み目
194	CⅢ層	頸部	棒状工具による横位沈線→刻み目	横位ナデ	橙7.5YR6/8	A:多B:中C:多	
195	CⅢ層	口縁部	横位ナデ→棒状工具による横位沈線→縦位撚糸文	横位ナデ	橙7.5YR7/6	A:多B:多C:多D:微	口唇部羽状の刻み目
196	BⅣ層	口縁部	横位ナデ→縦位撚糸文→棒状工具による横位沈線	ケズリ→ナデ	暗オリーブ褐2.5Y3/3	A:多B:多C:多D:微	口唇部沈線→羽状の刻み目
197	BⅣ層	胴部	横位ナデ→横位ケズリ→縦位撚糸文	斜位ナデ	明黄褐10YR7/6	A:多B:多C:多	
198	BⅣ層	胴部	ナデ→縦位撚糸文→棒状工具による横位沈線	斜位ナデ	黄橙10YR8/6	A:多B:多C:多	
199	DⅣ層	胴部	横位ナデ→縦位撚糸文→棒状工具による横位沈線	横位ナデ	橙7.5YR7/6	A:中B:中C:多	
200	DⅣ層	口縁部	ナデ→棒状工具による横位沈線→斜位沈線	横位ケズリ→ナデ	明褐7.5YR5/6	A:多B:多C:多	C特に多い・粗大
201	C	胴部	棒状工具による横位沈線→刻み目	横位ナデ	橙5YR7/6	A:中B:中C:中	
202	CⅢ層	口縁～胴部	粗雑なナデ→貝殻腹縁押し引き→沈線	不定方向のケズリ→ナデ	明赤褐5YR5/6	A:少B:少C多D:微E:多	
203	BⅣ層	口縁部	縄文	斜位ケズリ→ナデ	浅黄橙10YR8/4	A:多B:少C:中D:微	
204	CⅢ層	口縁部	縄文	横位ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	A:多B:少C:少D:微	
205	DⅣ層	胴部	縄文	ナデ→斜位縄文	橙5YR6/6	A:多B:多C:多D:少	
206	CⅢ層	胴部	縄文→ナデ	丁寧なナデ	にぶい橙7.5YR7/4	A:多B:中C:少	
207	DⅢ層	胴部	縄文	ナデ	褐7.5YR4/6	A:多B:少C:多D:少	
208	CⅢ層	底部付近	縄文	横位ナデ	浅黄橙10YR8/4	A:多B:中C:中D:微	
209	C	口縁部	斜位撚糸文	不定方向のケズリ	赤褐2.5YR4/6	A:中B:少C:多	焼成前穿孔あり
210	CⅢ層	口縁部	縦位撚糸文	横位ケズリ→横位撚糸文	淡黄2.5Y8/3	A:少B:中C多	
211	C	口縁部	撚糸文	横位ケズリ	暗灰黄2.5Y4/2	A:多B:少C:多	
212	表採	口縁部	不定方向の撚糸文→ナデ	横位ケズリ→横位撚糸文→ナデ	褐7.5YR4/6	A:中B:微C:多D:多E:微	
213	BⅣ層	底部	縦位方向撚糸文→ナデ	丁寧な横位ナデ	橙5YR6/8	A:多B:多C:多D:微	
214	CⅢ層	胴部	横位撚糸文→縦位撚糸文	横位ナデ	橙7.5YR6/6	A:多B:多C:多D:微	C特に多い・粗大
215	CⅢ層	胴部	横位撚糸文→ナデ	丁寧な斜位ナデ	橙7.5YR7/6	A:多B:多C:多	C粗大
216	C	胴部	縦位撚糸文	不定方向のケズリ	橙5YR6/8	A:多B:多C:多D:微	C特に多い・粗大
217	CⅢ層	胴部	網目状撚糸文	横位ナデ	橙7.5YR7/6	A:多B:少C:多D:微	
218	C	胴部	網目状撚糸文	横位ナデ→網目状撚糸文	にぶい黄橙10YR6/4	B:少C:多D:中	
219	CⅢ層	口縁部	横位二枚貝条痕・縦位二枚貝条痕	丁寧なナデ	浅黄2.5Y7/3	A:多B:多C:多	A特に多い
220	C	口縁部	不明	不定方向のケズリ	明赤褐2.5YR5/6	A:少B:多C:多D:微	
221	BⅣ層	口縁部	不明	斜位ケズリ	橙7.5YR7/6	A:中B:多C:多	

表6　出土土器観察表

胎土（長石:A　角閃石:B　石英:C　砂粒:D　雲母片:E）（多量:多　中量:中　少量:少　微量:微）

No.	出土	部位	外面調整	内面調整	色　調	胎　土	備　考
222	C Ⅲ層	口縁部付近	ナデ→突帯貼付	摩滅により不明	橙7.5YR7/6	A:少B:微C:多	
223	C Ⅲ層	胴部	斜位ナデ→工具による沈線	丁寧な斜位ナデ	黄褐2.5Y5/4	A:多B:微C:多D:中E:多	
224	B Ⅳ層	胴部	ナデ→工具による縦位波状沈線→貝殻腹縁刺突	ナデ	橙7.5YR7/6	A:多B:中C:多D:少	
225	B Ⅳ層	口縁部	工具による押し引き→横位波状条痕→斜位条痕	不定方向のケズリ→ナデ	にぶい黄橙10YR6/3	A:多B:多C:多	A特に多い
226	C Ⅲ層	胴部	縦位貝殻腹縁条痕	丁寧な横位ナデ	にぶい赤褐5YR5/4	A:中B:少C:多D:中E:多	外面煮こぼれ・C特に多い・粗大
227	C Ⅲ層	胴部	遅点	摩滅により不明	明赤褐5YR5/6	A:多B:少C:多D:中	
228	B Ⅳ層	底部	山形押型文	ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	A:多B:多C:多D:少	
229	表採	口縁部	工具による横位沈線→縦位沈線	横位沈線→沈線処理	褐10YR4/4	A:少B:多C:多D:微	口唇部刻み
230	D Ⅲ層	口縁部	ナデ→ロッキング→突帯貼付	丁寧なナデ	黄褐10YR5/6	C:多D:多E:少	
231	表採	胴部	棒状工具による回線	横位条痕→ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	A:多B:多C:少	
232	表採	胴部	棒状工具による回線→沈線処理	斜位条痕→ナデ	橙7.5YR6/6	A:多B:中C:多D:少	
233	表採	胴部	沈線→綱文→沈線処理	丁寧な横位ナデ	橙7.5YR6/6	A:中B:多C:多D:微	
234	表採	胴部	突帯貼付→刻み目	横位ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	A:多B:多C:多	
235	S1-06	胴部	斜位押型文	横位ケズリ→ナデ	にぶい橙7.5YR7/4	A:多B:中C:多D:中	
236	S1-06	胴部	縦位山形押型文	丁寧な横位ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	A:多B:多C:多	
237	S1-15	胴部	横位山形押型文→ケズリ	横位ナデ	にぶい赤褐5YR5/4	A:多B:多C:多D:微	内面炭化物付着
238	S1-16	胴部	又状工具による斜位短沈線	剥落により不明	にぶい黄褐10YR5/3	A:微C:多E:多	
239	SC-16	胴部	又状工具による斜位沈線	横位ケズリ	橙7.5YR7/6	A:多B:中C:多D:微	
240	S1-19	胴部	山形押型文	丁寧な斜位ナデ	明赤褐5YR5/8	A:多B:多C:多D:中	
241	S1-19	胴部	押型文	ナデ	にぶい黄橙10YR6/4	A:多C:多D:少E:中	
242	S1-34	胴部	棒状工具による沈線	丁寧な横位ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	A:多B:少C:中	
243	S1-02	口縁～胴部	横位ナデ→刺突→横位ケズリ	横位ケズリ	明黄褐10YR6/4	A:多C:多D:多	243と同一個体
244	S1-02	底部	横位ケズリ→刺突→横位ナデ	丁寧なナデ	淡黄2.5Y8/4	A:多C:多D:多	243と同一個体
245	S1-02	胴部	横位山形押型文	丁寧な斜位ナデ	橙5YR6/8	A:多B:微C:少D:多	
246	SC-05	胴部	山形押型文	不定方向のケズリ	橙7.5YR6/6	A:多C:多E:多	内面炭化物付着・C特に多い
247	SC-06	胴部	縦位山形押型文	横位山形押型文・不定方向のナデ	黒褐10YR3/2	C:多D:中E:多	口唇部深い刺突・C特に多い
248	SC-06	胴部	又状工具による羽状短沈線	丁寧なナデ	橙5YR6/6	A:多B:中C:多D:微	C粗大
249	SC-06	胴部	山形押型文	横位ナデ	にぶい橙7.5YR5/4	C:多D:多E:多	C特に多い
250	SC-08	胴部	横位山形押型文→縦位鎖糸文	丁寧な横位ナデ	暗灰黄2.5Y4/2	A:多B:多C:多D:微	

表7　出土土器観察表

Ⅲ・縄文時代早期以降の土器（229～234）

これらの土器は、全て表面採集による遺物である。（229）は縄文前期の曽畑式土器である。幾何学的な沈線文が内外面に施文されており、口唇部にも刻目が行われる。（230）は波頂部であるが、口縁が大きく外反しており、急に内湾するキャリパー状の口縁である。突帯の貼り付けを行う前に、工具によるロッキングが行われる。（231・232）は、幅の広い凹線による曲線が外面に施文されたものである。（233）は、二本間沈線を細かな縄文によって埋めたものである。施文は沈線→縄文の順である。（234）はカマボコ状の断面を呈す突帯の上に指頭状の押圧が加えられたものである。

第Ⅲ章　ま　と　め

今回調査が行われた丘陵地は、開墾により頂上部を始めとして、部分的にかなり削平が進行していただけでなく、部分的にも土取が行われており、残存状況としては決して良好な状態ではなかった。特に、アカホヤ火山灰よりも上層に関しては、b区の一部を除いては、包含層が完全に破壊されていた。しかし、それ以前の時期に関しては、残された部分より考察が可能である。

旧石器時代の遺物について

旧石器時代は、主にe区より少量出土した。

総数は41点であり、製品としては、積極的に評価してもスクレイパーが1点あるに過ぎず、他は二次加工剥片が少量あるのみである。石核が出土していないが、剥片に残された痕跡を観察すると、剥離の順序がまちまちなものが多い。出土資料のうち（7）以外は、連続的な剥離を行おうとした意図が希薄であり、母岩から剥離を行う過程で、良好な角度を見つけては打撃を繰り返したと推測される。剥片の表面を観察すると、ローリングを受けたものも含まれることから、これら石器群はＡＴ降灰直後に、丘陵上で製作され、ＡＴ層が斜面に崩落した際に混入したものであろう。3層に分かれる遺物の出土は、崩落が数回に渡った事を示すものであり、かつては全て同じ時期に製作されたと考えられる。最も下層より出土した遺物がＡＴ層のすぐ上であることから、これらの石器群はＡＴ層の直上に相当すると考えられる。なお、流れ込みによる堆積であるため、丘陵地上に存在した石器群の規模については、考察が不可能である。

ちなみに、表面採集ながら細石刃核も1点確認され、調査区内に旧石器時代終末期も人が生活を行ったことが判明した。

縄文早期の遺物について

縄文時代は、早期はその初期段階より遺物が確認される。

Ⅰ～Ⅳ類類は、縄文早期前半の南九州に広範に分布する南九州貝殻文系土器である。こ

のうち、Ⅰ類は知覧式土器、黒川忠弘氏の言う加栗山式土器にあたる。

Ⅱ類のうち、(16・17) は、口縁部文様帯以下は条痕文を基調としていることから、前平式土器と考えられる。(18～21) は、口縁部文様帯も形成せず、条痕文が施文されたものであるが、これは早期前半の円筒条痕文系土器である。これは、対岸の椎屋形第1・第2遺跡において確認されるほか、隣接するズクノ山第2遺跡E地区はこの土器が大半を占めている。なお、(20) の口唇部には内傾が認められるが、これは後の桑ノ丸・下剥峯の影響も考えられる。

Ⅲ類は桑ノ丸式土器である。3つに細分したように、文様には幾つかのパターンが見られるが、これらはバリエーションとされる。また、その他の土器とした (224) も、貝殻腹縁刺突という手法は特異ではあるが、この範疇として捉えられる。

Ⅳ類のうち、(52～55) は下剥峯式土器である。なお、残りの (56～59) は下剥峯式とは文様が異なるが、これも南九州貝殻文系土器に含まれると考えられる。

Ⅴ類aである山形押型文土器のうち、(60) は外反が弱く、文様的にも古い様相を示しているが、口縁が大きく外反するものが主体を占める。観察を進めると、外反が強いものほど横位の施文が崩れる、若しくは外反部のみ無文化すると言う関係を見ることが出来るが、これは、施文時の物理的な理由によるものと思われる。東九州の押型文の編年は、横位が縦位に先行するが、「横位から縦位へ」の変遷過程を示す土器となろう。(71・72) は外反しないが、縦位の施文が行われる。これは、この段階において既に縦位の施文が一般化したことを示すものである。なお、(71・115) の口縁部は肥厚しており、口唇部は内傾するなど、桑ノ丸式土器に似た器形を呈す。この時期には、後に述べるように「文様の併用」がしばしば行われるが、文様のみならず、器形も含め土器の製作技法が交錯したことを表している。(107～109) は、口縁部から頸部が外反し、胴部が膨らむ器形から手向山式土器と考えられる。(132) は、本遺跡では唯一の壺形土器である。

Ⅴ類bは楕円押型文である。細粒であるものも多く、それのみに着目すれば、編年上は古く位置付けられるが、文様が何度も施文されたり、口縁の外反が強かったりするなど、東九州における一般的な編年とは異なる内容を示しており、編年的に後出となる可能性も考えられよう。(157) 以下は田村式土器に含まれる。

Ⅴ類cは変形押型文である。このうち、格子目は、押型文土器のバリエーションとして各地の遺跡からしばしば出土するが、(176) の菱形は、南九州特有の施文手法とされるものである。また、(174・175) は三角形状を呈しているが、これは高岡町天ヶ城跡からも出土が確認されたものである。

Ⅴ類dは、文様が併用されたものであり、(177～179) は山形押型文＋撚糸文、(181) は山形押型文＋縄文、(182) は山形押型文＋条痕文、(183) は山形押型文＋沈線文と、どれも少数ではあるが、山形押型文に様々な文様が併用されたことが窺える。このような、系統を異にする文様手法が行われた背景には、異なる土器を使用した集団との接触があったことを示すものである。

Ⅵ類は平椎式土器であるが、(184～189) はその中でも妙見式土器と呼ばれる一群である。また、(190～193) は、胴部文様として沈線を多用したものである。

Ⅶ類は塞ノ神式土器である。高橋信武氏の分類基準に沿えば、(194～199) は、Ⅰ式のいずれかに属すると思われる。また、(202) は、Ⅲ式とされるものに類似する。

Ⅷ類は、器面に縄文が使用された一群である。

Ⅸ類は、器面に撚糸文が使用された一群である。

Ⅹ類は、器面に条痕文が使用された土器である。1点のみの出土であるが、熊本の縄文早期前半の遺跡より出土する中原式土器の文様に類似する。その場合、口縁部以下まで施文されていることから、中原式の中でも後出になると考えられる。

ⅩⅠ類である無文土器の口縁部は、断面形態や傾きが桑ノ丸式土器のそれに類似する。施文は行われないが、同様の時期に属する可能性が高いと思われる。

ⅩⅡ類のうち、(225) は多種の条痕が施文されている。この土器の器壁や胎土、施文工具を観察すると、本遺跡でⅡ類とされた中の円筒条痕文土器と共通点が多い。施文手法が異なるが、密接な関わりのもとで製作されたと考えられる。

石器に目を向けると、遺跡の規模に比べ、石製品に乏しい傾向を見ることができる。主要に出土した製品は石鏃であるが、点数は僅々たるものである。また、縄文早期の食生活を物語る特徴的な遺物である磨石・石皿類であるが、磨石が20点近く確認されるのみで、石皿の出土はなかった。礫群が広がり、多くの土器が出土するこの斜面上にあって、これだけ石器の出土状況は、この斜面の「場の機能」を考える上での手がかりとなるであろう。

縄文時代早期の遺構について

遺構は、a～c区の斜面上より多数検出された。

検出された遺構の大半は、集石遺構と土坑である。しかし、集石遺構にも、礫の密集土には差があるほか、土坑にも礫が多く入る。これは、検出面付近に礫群が分布していたためであり、そのため両者の線引きは非常に困難である。ここでは、幾つかに分類した上で説明を行いたい。

Ⅰ類：礫が密集し、深い掘り込みを有し、掘り込みの底に、扁平な礫を配置するもの。
(SI－09、SI－13,SI－19、SI－20、SI－21、SI－23、SI－26、SI－27、SI－29)

Ⅱ類：礫が密集し、深い掘り込みの一端が急に深くなるもの。
(SI－07、SI－10、SI－17、SI－28)

Ⅲ類：礫が密集し、深さが均等で、深い掘り込みの底に礫が配されないもの。
(SI－01、SI－02、SI－04、SI－05、SI－08、SI－11、SI－12、SI－14、SI－15、SI－18、SI－22、SI－24、SI－25、SI－30、SI－32)

Ⅳ類：礫が密集し、浅い掘り込みを持つもの。(SI－34)

Ⅴ類：礫が疎らで、深い掘り込みを持つもの。(SI－07、SI－08)

Ⅵ類：礫が疎らで、楕円形の深い掘り込みを持つもの (SC－01、SC－02)

Ⅶ類：礫が疎らで、浅い掘り込みを持つもの。(SI－06、SI－16、SC－03、SC－04)
Ⅷ類：礫を全く持たないもの。(SC－09、SC－10)
Ⅸ類：それ以外、もしくは不明のもの。(SI－03、SI－31、SI－33、SC－05、SC－06)

このうち、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類は典型的な集石遺構と考えられる。Ⅰ類の掘り込みの底に配された礫は特徴的である。同時期の遺跡としては、町内では元野地区元野河内遺跡があるが、このような形態の集石遺構は確認されなかった。また、Ⅳ類は1基しか検出されなかったが、この遺構内からは、早期後半である平栫式土器が出土しており、この形態差は時期の違いに原因を求めることができる。

一方、Ⅴ・Ⅷ類は土坑と考えられる。Ⅴ類の覆土中には礫が見られるが、これは礫群からの混入と考えられる。なお、Ⅵ類も分類上は土坑であるが、平面や断面の形態から、これは橋の崩れ落ちた炉穴（連結土坑）と考えられる。なお、Ⅱ類の断面形も類似していることから、これも連結土坑である可能性が考えられる。その場合、一般的な「連結土坑」とは形態が異なる点と、礫群からの流れ込みとは思えないほどの礫が覆土中に密集している点が問題となる。なお、このⅡ類の覆土からは、いずれも多量の炭が検出された。

Ⅶ類は、確かに礫が密集するため集石遺構と考えられるが、密度は他の集石遺構よりも疎らであるため、断言は避けたい。

不明とされた中で、SC－06は本遺跡内最大の遺構である。明確な段を持ち、底部には平坦面が形成される。このような遺構が、縄文早期遺跡から検出された例は町内にはなく、今後、類例の増加による用途の解明が待たれる。

このように、縄文早期は開始期より後半に至るまで生活の痕跡が認められることが判明した。調査区内で最も多く確認された遺物は山形押型文土器であり、様々な土器が製作され、また多種の文様が使用・併用されたことから、本遺跡内において、土器製作技術の情報が交換されていたことが窺える。また、この斜面上からは礫群を始め、集石遺構や炉穴等の、特徴的な遺構が検出された。石器組成の貧弱な様相は、この地点全体が、調理施設として使用された可能性を表すものである。田野町内は、冬場にあっては西～南西方向からの強風が吹き荒れる地点として知られる。鹿村野台地も例外ではないが、この斜面は、丘陵により防がれ、風が殆ど感じられない(註1)。それを熟知した上で、この斜面に遺構を構築したとすれば、縄文早期の土地利用を考える上で、大いに参考になる遺跡と言えよう。

縄文時代早期以降の遺物について

縄文早期以降の土器は、いずれも少量であるが、遺物包含層が既に破壊されていたため、本来であれば、もっと多くの遺物が包蔵されていたと予測される。c区で検出された柱穴群は、それを物語る遺構と言えよう。

(238)は、九州の縄文時代前期後半に広く分布する曽畑式土器である。また、(230)の器面に見られるロッキングは、中期初頭の深浦式土器である。(231・232)の外面に施文される凹線文は、阿高式土器の流れを受けた、中期末～後期初頭に位置付けられる岩崎

式土器である。一方、(233) に施文される磨消縄文は、縄文帯の幅や沈線の太さから、最も可能性が高いのは中津式土器であり、後期初頭の段階に、この遺跡内で両系統の土器が存在したことも考えられる。東南九州の縄文後期土器研究は、初期磨消縄文土器の伝播時、在地系土器はどのような様相であったか、未だ不明瞭な状態が続いていることを考えると、両系統の土器が包蔵された土層の削平が、既に行われていたことは、残念というほかない。

(234) は弥生土器である。この丘陵地には、b・c区の開析谷を隔てた西側にあるズクノ山第1遺跡において、大規模な集落が確認されているが、本遺跡に一部が流れ込んでいると考えられる。

最後に、筆者の能力不足と都合により、遺構及び遺物の詳細な検討が充分に行えなかった点をお詫び致します。

(参考文献)

高橋　信武　「縄文早期後葉の九州」『九州縄文土器編年の諸問題』九州縄文研究会1998
吉本　正典　「妙見式の検討」『九州縄文土器編年の諸問題』九州縄文研究会1998
黒川　忠弘　「南九州貝殻文系土器」南九州縄文研究会2002
鳥田　正浩　「天ヶ城　上巻』高岡町教育委員会1998
桑畑　光博　「南部九州における縄文時代前期末から中期前葉の土器について」
　　『鹿児島考古』第27号　1993
金丸　武司　『元野河内遺跡』田野町教育委員会2001

註)

1・調査を通して体感したことである。丘陵の南西側で強風が吹き荒れる状態であっても、a～c区の斜面上は、殆ど風を感じることはなかった。また、これは夜間も同様である。しかし、12月中旬の日照時間は、午前11時から午後2時半の間に限られており、生活を行う上で、霜には悩まされたと思われる。

旧石器出土トレンチ近景

旧石器出土トレンチ近景

旧石器遺物出土状況

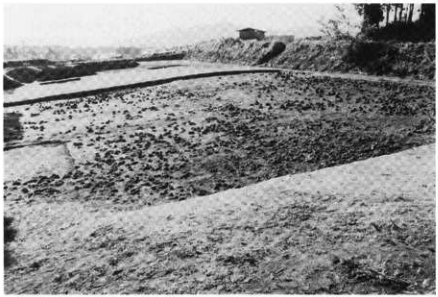
図版 2

旧石器遺物出土状況

e区土層断面

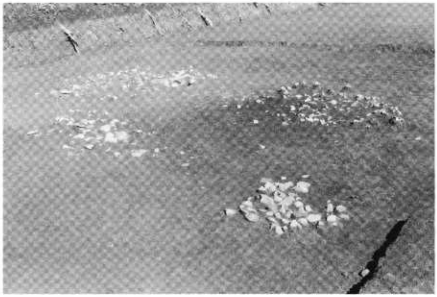
礫群－1検出状況

礫群－2検出状況



礫群－2検出状況

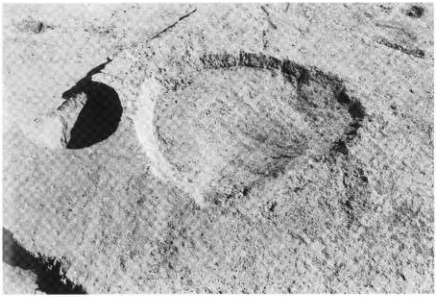
図版 4



a 区集石遺構検出状況

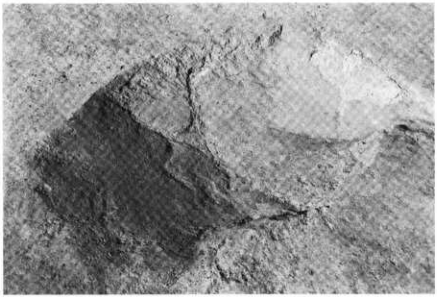
b 区集石遺構検出状況

SI-01 検出状況



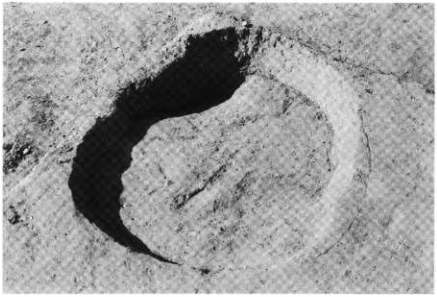
SI-01、SP-01 完掘状況

SI-02 検出状況



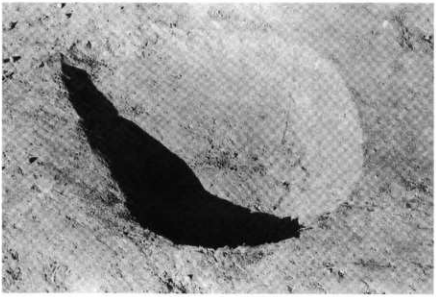
SI-02 完掘状況

図版 6



SI-03 完掘状況

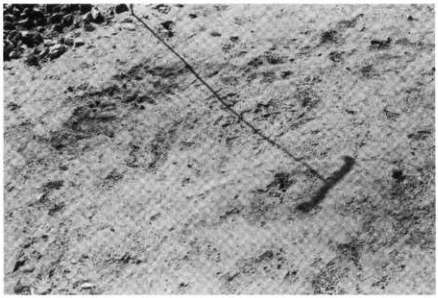
SI-04 検出状況



SI-04 完掘状況

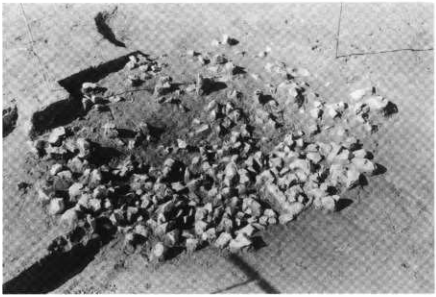
SI-05 検出状況

SI-05 完掘状況

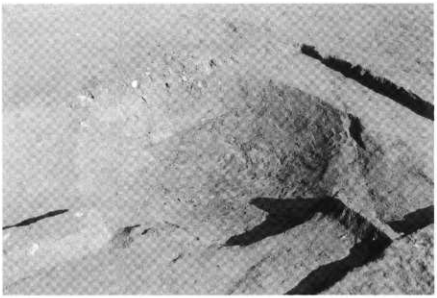


SI-06 完掘状況

図版 8

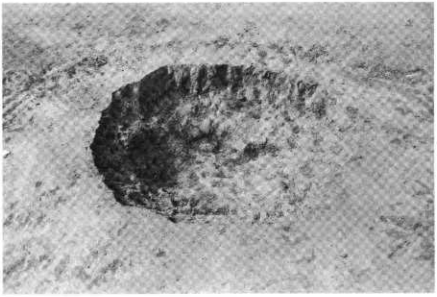


SI-07 検出状況



SI-07 完掘状況

SI-08 検出状況



SI-08 完掘状況

SI-09 検出状況

SI-09 完掘状況

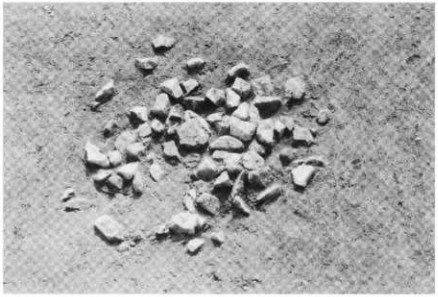
図版 10

SI-10 検出状況

SI-10 完掘状況

SI-11 検出状況

SI-11 完掘状況



SI-12 検出状況

SI-12 完掘状況

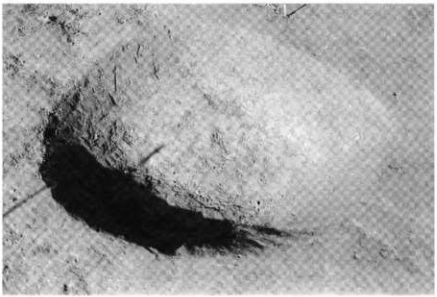
図版 12

SI-13 検出状況

SI-13 敷石検出状況

SI-13 完掘状況

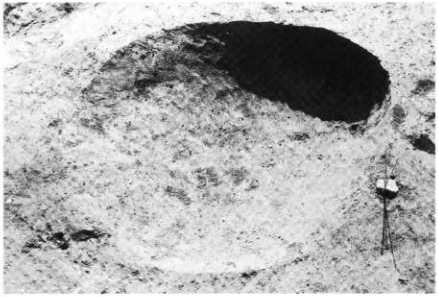
SI-14 検出状況



SI-14 完掘状況

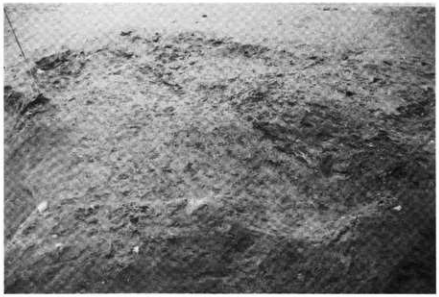
SI-15 検出状況

図版 14



SI-15 完掘状況

SI-16 検出状況



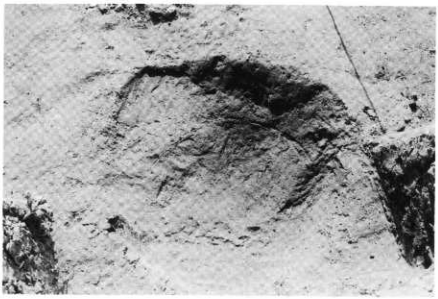
SI-16 完掘状況

SI-17 検出状況

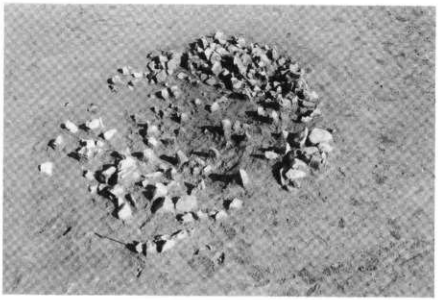
SI-17 完掘状況

SI-18検出状況

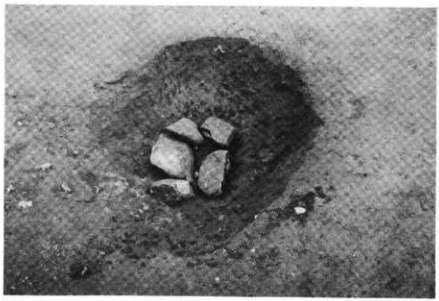
図版 16



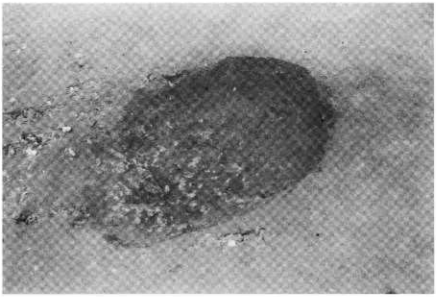
SI-18 完掘状況



SI-19 検出状況

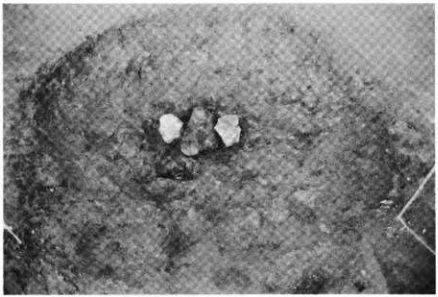


SI-19 敷石検出状況



SI-19 完掘状況

SI-20 検出状況

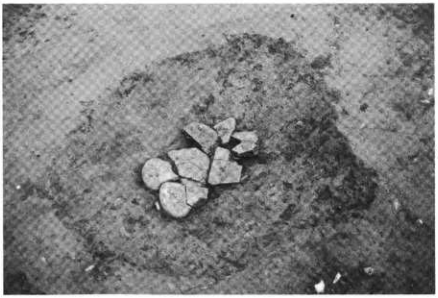


SI-20 敷石検出状況

図版 18

SI-20 完掘状況

SI-21 検出状況



SI-21 敷石検出状況

SI-21 完掘状況

SI-22 検出状況

SI-22 完掘状況